
僕と幻想郷と召喚獣

影月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幻想郷と召喚獣

【Nコード】

N2653Z

【作者名】

影月

【あらすじ】

バカテスと東方のコラボです。

明久魔改造、咲夜はPADじゃない(ここ重要)、文才皆無なんです
すが頑張ります

あと更新ですが思いつきで書くんできなり5話進んだりとかまば
らです。

ストック?何それおいしいの?

15指定は残酷描写とうあるためつけています。

挨拶兼補足

初めまして影月です。

このssはバカとテストと召喚獣と東方とちよつとメルブラ要素がある内容です。最初に補足。

主人公は明久。

東方キャラ登場（頑張ります）

お話のメインはバカテスト本編

過度のブレイク&mp;キャラ崩壊

メルブラ要素あり

等ございます。お気をつけて下さい。

あとキャラ設定ですが、

明久、咲夜は同じ歳、霊夢、魔理沙は2、早苗は明久の一つ下となつております。

そして最後に：咲夜はPADではない！

では次回に（逃亡）

プロローグ1（前書き）

振り分けテスト日の自宅編です。ではどうぞ

プロローグ1

「ZZZZZ…」

「…ひ…る。…久……てば…」

「う…ん？」

「明久、起きろって、今日はテストなんだから、遅刻したらやばいぞ」

「ふ…うああああ…なんだ…妹紅か…どうしたの？」

朝、なにやら呼ばれたので起きてみると、目の前に妹紅がいた…

彼女の名前は藤原妹紅。僕の幼馴染で何かと気をかけてくれる少女だ。まあホントはまだ色々あるんだけど、それはのちほどに。しかし、妹紅がなぜここにいるんだろう？

「あ、やっと起きた。今日はテストだし一緒に行こうと思ってな。

幽香もいるし早く着替えてこいよ」

「え、あ…うん、わかったよ」

「…二度寝すんなよ？」

「しないよ!？」

妹紅が部屋から出て行ったのでとりあえず着替えよう、幽香も来てるらしいし早く行かないとやばい!!

制服に着替えて（間違えても女子の制服じゃないからね!？）（リビングに行く）と、

「あら、明久おはよう。今日は起きるの遅かったわね」

「幽香おはよう」

声を掛けてきた少女（作者「え？少女（ピチューン）」）なんか電波が聞こえたけど無視しよう…

気を取り直して、彼女の名前は風見幽香。見た目、雰囲気的にもお姉さんって感じだけど同級生である。

実際はというと、彼女達は「幻想郷」ということは違う場所の住人で、妖怪（妹紅は違うけど…）なのである。本当は外に出たりしてはいけならしいが、僕が原因で幻想郷の外にごく一部だけ出る事が許可されている。

それより・・・

「なんで今日は遅いつてわかったの？」

「そこの花から聞いたのよ」

「あゝなるほど」

花から聞いた…聞き様によってはおかしな発言だけど事実である。彼女達は「〴〵程度の能力」というものを持っており（人間でも持っている人はいる）幽香の能力は「花を操る程度の能力」その名前の通り、花を操ったり、会話したりできる。

「よし、じゃあご飯作るけど、何かご要望とかはある？」

「お任せする（するわ）」

二人を待たせるわけにはいかないし、早く作るかな…

こうしていつもの日常の朝が始まった…でもこの時僕はまだ気づいてなかった…この後僕の運命が決まる重要な事件があることを…

プロローグ1（後書き）

うん…ggdgdだ…orz

読者様に質問ですが、会話の前に名前をつけたほうがいいですか？

1 つけてほしい

2 いらなかな

期限は4日ほどでお願いします。

プロローグ2（前書き）

テスト時ですね〜ここで明久は運命の扉を開く！！（嘘です

一応ですが幻想郷の事件は東方星蓮船まで行っておりオリジナルで東方儚月抄と似たような事件も起こっているということになりました。

なんか自分で首しめそう…

プロローグ2

side 明久

「…ではテストを開始してください」

さてテストが開始したな…え、その間？普通にご飯食べて、三人で来ましたよ？話がないのは作者が書いてないだけです。（私を見ないでえええ、てかメタるなああby作者）また電波が…ま、まあテストに集中しよう…

ガタッ…

「ん？…！？」

椅子が倒れる音がしたので隣を見てみると、床に倒れこんだ少女がいた。たしかあの子は…

「姫路さん！？大丈夫！？」

とりあえず近づいて確認してみるけど…いけない、顔色が悪い熱もありそうだ…

「姫路、試験途中での退席は無得点扱いとなるが、構わんか？」

この教室の担当の教師から出たのは心配とかではなくこんな言葉だった。

「ちょっと先生！？体調を崩してるのにその言葉は…」

「吉井は席に戻りなさい。で、どうする姫路？」

「……退席……します……」

「では姫路、君は無得点だ」

そう言つて、教卓に戻ろうとする教師。ちよつ、まさかこの教師倒れた人間に自分で保健室に行けつて言うのか！？

「……しつ……れい……しま……あ……！？」

「！？？」

教室を出ようとしたところで、姫路さんがこけそうになったのでとつさにその体を受け止める。

「大丈夫？姫路さん？ほら、掴まって、保健室まで連れて行くから」

「吉井くん……でも……」

「気にしないで」

さすがに、ほつとけないし連れて行くこと。

「吉井、何をしている！！早く席につけ！！」

「こんな状態の人を放っておくなんて出来ません！！」

「貴様も、無得点にするぞ！」

「御好きにどうぞ。ここで体調の悪い姫路さんを見捨てる最悪な人間になるくらいなら、無得点になったほうがましです」

「待て、吉井貴様！」

とりあえず、後ろでなんか叫んでるけど無視だ無視。とりあえず姫路さん歩くのもきつそうだし……

「姫路さん、ちょっとごめんね？」

「え？…… / / / / / ! ?」

ちよつとあれだけ抱えて（俗に言う、お姫様だっこ）行こう。

side 明久 end

side 妹紅

やっぱ、明久だよな。

自分よりも周りを大事にする……。私もそんなあいつに助けられたしな……。

（さくでどうしようかな……）

明久は無得点だし、あいつがないとこ行ってもつまらないしな……

幽香もそうみたいだし……

いつその事名前無記入で出すかな？

「チツ、屑が……」

そう考えてると、教師があり得ないことをほざいた気が……

「まったく、あのバカの考えてることはわからん。ましてやあの屑ごときが私を侮辱して……」

…うん、聞き間違いじゃないらしいな…

『『ガタッ！！！』』

あら？音が二つ？気になってそっちを見てみると、すごい笑顔の幽香が…なるほど考えてることは同じってことだな…

「？何だ藤原、風見、お前たちも無得点になりたいのか！？」

なんか言ってるけどまあいい…

「とりあえず…」

「ええ、まあとりあえず…」

「な、何だお前たち！？」

「最低な屑は、お前だ（貴様よ）」

『『ドロン！！…！…！…！…！…！…！』』

「げぶ！！…？？」

「じゃあ、私も退席しますね」
「私も退席するわ」

なんか力加減ミスった気がするけど、まあいいか死んでないし…

あ…やばい…慧音と明久に怒られるかも…覚悟しなきゃか…ハア…

side 妹紅end

side 明久

なんか教室からすごい音がした気が…気のせいだな…

よし着いた。

「失礼します」

「あら？明久君、どうしたの？」

「永：八意先生いたんですね。すみません急患です」

「そう、じゃあそのベットの寝かせて」

彼女は八意 永琳。保健室の先生で、「幻想郷」の医者である（休みには幻想郷に帰ってるみたいだ）。

「うん、普通の熱みただし親御さんに連絡すれば大丈夫ね」

「そうですか」

「でも、明久君？テスト中じゃないの？」

「実は……」

とりあえず、さっきあったことを永林に話した…

「ふくん…その先生って何て名前？」

「え？鬘先生です」

「そう…フフフ…」

なんか笑ってるけど目が笑ってない…とりあえず、先生ご愁傷さま。

「で、この後はどうするの？」

「もうテストは受けられないし妹紅と幽香を待とうかと」

「あら、それならお話ししましょうか。今暇なのよね」

「そうですね」

とりあえず話してる途中で、妹紅と幽香が来たので事情を聞いたところ、永琳が一層笑っていない笑顔になったことだけはここに記そう。

帰宅後、僕たち3人は慧音から2時間ほど（二人は+2時間）説教を食らった・・・

プロローグ2（後書き）

おまけ

「でもさ慧音、その教師明久のこと侮辱したんだよ？」

「？どういうことだ？」

「あゝそれはね（幽香説明中）……っということよ

「………ほう、でその教師の名前は？」

「ゝ先生（慧音切れてるな……）」

「（切れてるわね……）」

『プルプルガチャッ』

「ああ、永琳か？ちようどよかった……実は……ということだから頼む」

「（ご愁傷さま）」

後日、この教師は首になったそうだ……（妹紅談

第1話 朝の会合（前書き）

いきなりですが、明久は観察処分者ですが、原因は原作と違います。でも、周りからの扱いは原作とほぼ変わりません。

第1話 朝の会合

4月…

今日は文月学園の始業式である…

その頃明久は…

「ZZZZZZ」

「…うん…ZZZZZZ」

「もう…まだ寝てるのかしら…明久おきなさ…」

「うん？ふああ…あ、幽香おはよう」

起きてみると幽香がいたので挨拶したんだけど、何で固まってるんだろう？

「…おはよう。ところでそれ、何？(ニコッ)」

「え？(隣を見る)…うんまず、理由言いたいから聞いてくれる？」

「まあ…聞いてあげるわ…」

隣には昨日一緒にゲームをしていた妹紅が眠っていた…遊び疲れて倒れる形で一緒に寝ちゃったんだろう…

「実は昨日モン　ン3してて…」

「…何時までしてたの？」

「えっと3時くらいまでは記憶がある」

「…」

「…」

「はあ、ゲームは構わないけど時間には気をつけなさいって言うるでしょ…」

「あははは…ごめん…」

「まあいいわ。日曜日弾幕勝負で許してあげる」

「えっ…」

「それとこれとは話は別よ(ニコッ)」

「ハイ、ワカリマシタorz」
こうして僕は死亡フラグを立てた…

「明久ごめんな。寝くなつちやつてそのまま寝ちゃった…」
「いいよ、夜遅くまで遊んでたのも悪いし、弾幕勝負で済んだだけ
ましたよ…」

朝ご飯を作っている途中、起きてきた妹紅が謝ってきた。でもみんな抱き癖があるのだろうか…幻想郷での宴会後も朝起きたら結構みんな抱きついてきてるし

「あはは、まあ明久なら大丈夫でしょ」

「ひどいな、僕は普通の人間だよ？」

「…普通の人間が砲撃とかを切ったりしねえよ…まあかつこいいけどさ…ノノノ（ボソツ）」

「?どうかした？」

いきなり顔赤くしてどうしたんだろう？

「いやノノ何でもないノノノ」

「そう?ところでさ…」

やっぱりこれは言わなきゃだよな…

「妹紅：やっぱり男子制服で行く気？」

そうである、妹紅は女子制服ではなく男子制服なのである…

「ん?あゝ、うんだってスカートって慣れなくて…それに似合わないし」

「そうか…僕は似合うと思うけどな」

「あはははノノまあその、ありがとう」

「明久、そろそろ食べないと時間危ないわよ」

「あ、うんわかった。妹紅運ぶの手伝って」

「わかった」

さて、遅刻したらやばいし、早く食べなきゃね。

「おはよう、吉井、藤原、風見」

校門前でスーツを着た先生に出くわした。

「おはようございます、て…西村先生」

「おはようございます、鉄人」

「おはようございます、西村先生」

「ああ、ところで吉井、今鉄人と言いかけなかったか？あと藤原、西村先生と呼べと言ってるだろう」

「気のせいですよ、先生」

「え？かつこいいと思うけどな…鉄人って」

彼は西村先生。通称、鉄人。趣味がトライアスロンだということからそう呼ばれている。また、補習担当の先生で生徒から鬼の補習をするということから相当恐れられている。

「まあいい。ほれ、お前たちのクラスわけの結果だ」

結果が書かれた封筒を鉄人が僕と二人に渡してくる。僕と二人は一緒に封筒の口を破く。

「吉井、先生はお前の行動は立派だと思う。結果は残念だったが…」

「いいんですよ、先生。これは僕が選んだことですから。」

「そうか…」

案の定、Fクラスだった。まあ仕方ないよね、途中退席だし

「しかし、藤原、風見貴様ら教師を殴るとはどういうつもりだ！」

「あいつが明久のことをバカの屑呼ばわりしたからだ（したからよ）」

「確かに教師としてはあるまじき発言と行為だが、吉井や上白沢先生たちに迷惑をかけたら意味がなかるう…」

「うっ…それはたしかに…」

「言いごたえ出来ないわね…」

「まあ今回は罰も受けているから処分はなしだ…吉井と上白沢先生
たちに礼を言っとけよ?」

「…はい」

「あはは、気にしなくてもいいよ」

「先生、そろそろ自分たちは行きますね」

「んっ、そうか。」

あまり話しこんでると遅刻しちゃうしね

第1話 朝の会合（後書き）

1話まで書けた：一応ですが、宴会時明久は基本酒は飲みません。まあ飲んでも酔いませんけどね。あと生活ですが、ゲームは買うけど日常に余裕があるくらいには節約しています。暮らしとして

幽香 明久 慧音と妹紅

てな感じにアパートに住んでいます。

第2話 AクラスとFクラスのゴリラ（前書き）

…え？PV2000超え…？頑張らないとだな…

第2話 AクラスとFクラスのゴリラ

Aクラス前

「まだ時間あるし、Aクラス見ていこうぜ」
始まりは妹紅のこの一言だった。

「確かに時間あるし、見ていこうか」

「そうね」

少年少女達移動中…

「……………」

「アハハハ…」

「何よこれ…」

目の前には、普通の教室の5倍はある教室だった…

「無駄にお金のかかった教室だね…」

「冷蔵庫とエアコンが個人であるし、ていうか何あの大型ディスプレイ！。それに天井ガラス張りだよ！」

「格差社会ってやつね」

3人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性、学年主任の高橋洋子が立っていた。

「あ、やっぱりあの先生が担任なんだ…」

「私あの先生苦手だな…」

「私、間違ってもAクラスじゃなくてよかったかも、って今実感したわ…」

これといって悪い先生ではないのだが、この二人はどちらも高橋先生が苦手らしい。

「でははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来て

きてください。」
「?????????はい。」

名前を呼ばれ立ったのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女、霧島翔子だった

「同性愛者が…」

「「え?」」

霧島翔子は一年生の頃からその容姿で多くの男子から告白されてきた。が、彼女はそれをすべて断ってきた。そのうち彼女は男に興味がないというふうに噂されるようになった。

「いや、霧島さんには同性愛者じゃないかって噂があるじゃない?」

「あく確かにそうだな」

「それがどうかしたの?」

「いや…僕にはそう思えなくてね…もしかしたらずっと1人の男の子を想い続けているのかもしれないと思ってね」

「「そう…なんでこれで自分のことには気づかないんだろう(のか

しら)…(ボソツ」

「?」

「そろそろ教室行こうか」

僕たちはFクラスの教室に歩き出した。

この時僕は、僕たちを見ている銀髪の少女に気づいていなかった。

「ねえ…僕たちいつの間に別世界に来たのかな?」

「明久、現実を見てくれ…私だって逃避したいの我慢してるんだから…」

「これは…ひどいわね…」

今僕たちが目になっているのはとても教室とは思えない、それこそ山

奥の山小屋のような教室だった。

「と、とりあえず中に入る。きつと外よりはマシだよ。」

「そうだな…」

「そうね」

そう言つて、僕は教室のドアを開いた。

『ガラッ』

「おはよ」「さつさと席つきやがれ、蛆虫やろう」「う?」

なんだろう、この教室。入った第一声罵倒だった…

「つて雄二なんで教卓に立ってるの?」

「そりゃ担任が」「蛆虫やろうとは言い根性してるな(わね)…」「え?」

罵声を浴びせた少年、坂本雄二はその方に目を向けた。

そこにはもこたn…妹紅とUS…幽香がすごい笑顔で立っていた…

「女の子に対して蛆虫呼ばわりなんて失礼ね…」

「まて、それはお前たちじゃなくて明久のことで…」

「ほう、明久を蛆虫呼ばわりなんて…」

「覚悟出来てるんだろうな(わよね)?」

「ち、ちよつと待つてくれ!。言い過ぎた。俺が悪かった!。だから??????あ、明久!。助けてくれ!。」

雄二が助けを求めてくる…仕方ない…

「二人とも…」

「なに?明久」

「あとでやつてもかまわないから、今は席に着こう?」

「「そうだな(そうね)」」

「ち、ちよつと待て明久!?見捨てる気か?!」

雄二は必死に助けを求めるが、

「だって原因雄二じゃん」

僕は切り捨てることにした。

第2話 AクラスとFクラスのゴリラ（後書き）

次回のお話は？

とうとう始まった本編、雄二のおとしめようとする策略に明久はどう
う対抗するのか？

お楽しみに（大ウソです

第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台（前書き）

明久の紹介どうしようかな…あと最初の担任変更b

第3話 自己紹介と粉砕されるちゃぶ台

「君たち、そろそろ授業始まるから席につきなさい」

「あ、すいませ…って慧…上白沢先生…」

後ろから声がかけられたので振り返ってみると、そこには慧音が立っていた。

彼女は上白沢 慧音。彼女も幻想郷の住人で、妹紅との同居人である。幻想郷でも寺子屋で教師をしているが、一応のこちらでの住人の監視を理由に教師をしている

「あ、慧音おはよう」

「藤原さん、学校では上白沢先生です」
敬語なのは教師としてのけじめらしい。

「さて今日からFクラスの担任になる（黒板に名前を書こうとする）
…上白沢慧音です」

「なあ、明久慧音どうしたんだ？」

「さつき黒板見たときチヨークがなかった…」

「この学園ホントに勉強させる気あるのかしら…」

ちなみに席は、妹紅が前で、幽香が後ろである。あ、慧音がチヨークを取りに行った…

「うおおおお！！すげえ美人だ！！」

「不思議な帽子をかぶってるが、逆に美人度が増してる！！」

戻ってきたみたいだね…（頬に血が付いているようにも見えただけ気のせいのはずだ…）

「えっと、何かありますか？」

「付き合ってください！！」

「…」
「異端者には、死を！」

「…」
「すみませんでした！！！！」

「ばかばっかね」
「ハア」

「とりあえず、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

その男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。

「あと言っておくが、わしは男じゃ」

「……な、なんだと!?」

みんな失礼だよね…（明久は男として認識しています）

「……………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年、土屋康太だ。彼はあるあだ名を持っているがまあいいだろう。

そしてまたしばらく自己紹介が続いて、

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。あ、でも、英語も苦手です。趣味はー」

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女ー島田美波は一回区切り、

「吉井明久を殴る事です」

『シュツ!』（幽香がペンを投げた音）

『ガツン!!!』（慧音がチョークで相さ…はじいた音）

「え…?」

呆然とする島田さん

「風見さん、ペンは投げないように」

「考えとくわ」

「幽香…」

「…わかったわよ…」

僕が非難がましく名前を呼ぶとむすくれながらも了承した（妹紅に
関しては投げる前に止めた）

「島田さんもそのような発言は控えるようにしてくださいね（ニ
ッ）」

「は、ハイ…（あの二人…吉井とどういう関係かしら…）」

島田さん、妹紅と幽香を恨めしそうに見てるがどうしたんだろう…

「あいつには気をつけなきゃだよな」

「そうね…」

「どうしたの？二人とも」

「「気にするな（気にしないで）」」

2人はそれぞれ笑顔で言った。

「……………です、よろしく」

次は妹紅だな

「藤原妹紅です、男子制服を着ているが女なんであしからず」

「なるほど木下みたいなものか」

「じゃから、わしは男じゃ…！」

うん…もう突っ込むまい…

「あと、後ろにいる明久とは幼馴染です」

「…」「異端者には、死…」「…」「…」

「明久に手出したら…」

『バギャンツツツ！！！！』（ちゃぶ台が碎け散る音）

「こつなるからよろしく」

「「「YES sir!」」」

「も、妹紅…」

「だつて明久に…」

「それもだけどちやぶ台…」

僕らの前には碎け散つた妹紅のちやぶ台…

「」

「」

「明久、ちやぶ台一緒に使わせて…」

「別にいいけど…」

おつと次は僕か…うゝんこの微妙な空気どうしよう…仕方ない…

「「コホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくだ

さいね」

…ボケよう

次の瞬間、

「「「ダアアーリーーン!!。」」」

野太い男の大合唱。

「（言えるわけないだろうノノノ）」

「（明久つてそう呼ばれるのが好きなのかしら?）」

「（何言ってるんだ、あいつはノノノ）」

やばい、吐き気が…空気を変えるためとはいえやるんじゃなかった

…しかし妹紅と幽香と慧音はなんで顔赤いんだろう?

「????????失礼、忘れてください。とりあえずよろしくお

願います。」

さあ気を取り直して次は幽香だね

「風見幽香よ。好きなものは花、嫌いなものは花をいじめるものよ」

ふう、普通だ…

「あと、明久の幼馴染でもあるわ」

すっごい笑顔で言い放った…やっぱりこの人さだ…僕が困るところをそんなに見たいのか…？

「くそう、なんで吉井ばかり…」

「あんな不細工が…」

うわ〜みんなひどいや…精神的ダメージがやばい…

「あと、明久に手を出したら…」

？やばっ！？

『ゴウツ！！！！』（幽香がちゃぶ台に腕を振りぬく音）

『バシッ！！！！』（幽香の手をあわてて明久が止めた音）

「どうしたの？」

「幽香、ちゃぶ台が壊れるからストップ…（手がジンジンする…で
も手加減してたみたいだね…）」

「…仕方がないわね…」あの、遅れて、すいま、せん。「…」

「…え？。」

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台（後書き）

さて机が二つ犠牲になるところでした。

慧音の頬の血は気のせいさ…（ハハハ

ちなみにチヨークとペンは相殺で粉碎しました。

第4話 理由と試験戦争（前書き）

PV2000っていったころにはもう3000行きそつだ…

第4話 理由と試験戦争

教室のドアから現れた女子生徒を見てクラス内がにわかに騒がしくなる。それもそうだろう。彼女は本来このクラスにはいるはずがない生徒だ。

走ってきたのだろうか…息が少し荒い

「ちょうどよかったです。自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします？
?????」

小柄な身体と背中に届くまでの柔らかかそうな髪を持った少女、姫路瑞希はあわてて自己紹介をした。

「はいっ！質問です！」

すると1人の男子生徒が手を挙げた。

「なんでここにいるんですか？」

聞き方によっては失礼な質問だが、彼女の場合仕方ないのかもしれない

元々瑞希の学力は学年でも常に上位にあるほどに高い。

そんな彼女が学年最下位のFクラスに来たのだから誰もが疑問に思うだろう。

「そ、その????????振り分け試験の時に高熱を出してしまいまして????????」

やばい…あの時のことを思い出したら少しイライラしてきた…(プ
ロローグ2参照

「明久…」

「大丈夫だよ妹紅ちよつとね…」

いけないいけない、心配掛けたら意味ないじゃないか…
すると先ほどの姫路さんの発言に

「そういえば俺も熱が出たせいでFクラスに。」

「ああ、化学だろ？あれはむずかかったな。」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力出し切れなくて。」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩藤原さんが寝かせてくれなくて。」

「……異端者には…昨日私は明久の家に泊まってたからあり得ないな」「ちよつ、妹紅!?!?!: チクシヨオオオオオオ!!!
!!!!!!」

これは想像以上にバカばかりのクラスである。

「で、では一年間よろしくお願いします!」

そう言うつと瑞樹は明久と雄二付近の空いてる席に着いた。

「き、緊張しました〜」

そう言うつと瑞希が卓袱台に突っ伏した。

「あのさ姫「姫路」…」

体調は大丈夫か声をかけようとしたらゴリラが声をかぶせてきやが
つた…

「は、はい。何ですか?え〜と…」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしくお願いします。」

深々と頭を下げ、挨拶も丁寧なあたり育ちが良さそうである。

「ところで体調もう大丈夫なの？」

「よ、吉井君!？」

声をかけた僕を見て姫路さんが驚いた…なんだろう…ちょっと悲しい…

「姫路。明久がブサイクですまん。」

「そ、そんな!目もパツチリしてるし顔のラインも綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ!」

「そうね、女性に向かって蛆虫っていう奴よりははるかにかっこいいわね」

「うん、ゴリラよりは絶対かっこいいな」

「うぐっ…ま、まあ確かに見てくれは悪くないな。そういえば俺の知り合いにも明久に興味を持つてる奴がいたな。」

「それって誰ですか!？」

雄二が言うのと嫌な予感しかしないな…

「確か久保…」

「久保？」

「利光だったかなあ。」

久保利光 | (性別 オス)

…うん、だろうと思ったよ…

… (ホッ)

「ゴリラ…」

「え?…」

「覚悟はできてるか (わよね) ?」

「ちよっ!？」

「ほらそこ、静かにしなさい」

「あ、すいませ…」

『バキツ、パラパラ…』（教卓が残骸となった）

「…ちよっと、替え持ってきてますね（あの学園長どうシメテくれようか…）」

「あ、手伝いましょうか？」

「いえ、大丈夫ですよ吉井君。教室で待っていてください」

さすがにこの環境は姫路さんにも悪いし、いくら頑丈とはいえ妹紅達の体にも悪いな…

「…雄二、ちよっといい？」

「ん？なんだ？」

暇になったからか欠伸をしている雄二に声をかける。

「ここじゃ話にくいから、廊下で。」

「別に構わんが。」

「で、明久何の用だ？」

「雄二この教室の設備なんだけど。」

「ああ、想像以上に酷いもんだな。」

「そこで僕からの提案。Aクラス相手に試召戦争をやってみない？」

「…何が目的だ。」

雄二が警戒するように目を細めてこちらを見る

「何がって、姫路さんと妹紅達のためだよ」

「……」

「あの教室じゃ体調崩すのは目に見えてるからね」

「お前：本当に明久か？」

「それどういう意味さ!？」

「まあいい明久に言われるまでもなく俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思ってた所だ。」

「え、どうして？」

「世の中学力が全てじゃないって証明したくてな。」

「????？」

「まあいいだろ。先生も戻ってきたし教室に入るぞ。」

「ではクラス代表の坂本君、最後をお願いします」

雄二の番になり、雄二は教卓に上がった。目立ちたがりだね、雄二

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きに呼んでくれ」

「じゃあゴリラで」

妹紅：

「所で皆に一つ聞きたい。」

そう言つと雄二は視線を巡らせた。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……不満はないか？」

「……大ありじゃあつ!?!?!?!」

Fクラス魂の叫びである。ちよつと耳が痛い……

「だろう？俺だつてこの現状に大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。そこでこれは代表としての提案だが・・・FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」

こうして戦争の引き金は引かれた。

でも何だろう・・・すごく不安に感じる・・・

第4話 理由と試験戦争（後書き）

おまけ

「明久、ゴリラと何話してたんだ？」

「うん？あゝ試験召喚戦争についてね」

「あら、楽しそうねそれ」

「うん、特にこんなクラスじゃ、妹紅と幽香が体調崩さないか心配なんだよ」

「／／／／／／／／／／／」

「？」

第5話 戦力と観察処分（前書き）

．．．．．（ゴシゴシゴシ）
．．．

PV5000 超え．．．だ．．．と．．．？

第5話 戦力と観察処分者

「FクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う!!」
壇上で自己紹介をしていた雄二のいきなりの提案。だが、いきなり
言われても現実味のない提案にクラス中から非難の嵐が巻き起こる。

「勝てるわけがない!」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ!」

「姫路さんが居たら何もいらぬ。」

「もこたん付き合って」

「断る」

「ゆづかりん罵ってください」

「……シニタイノカシラ?」

「うおおおおおおおお!!!!!!」

何だろう、カオスだ…

試験召喚戦争は大まかに言えば、生徒が行うテストの成績によって
試験召喚獣の強さが決まる。そして試験召喚獣を使って擬似的な戦
争を行う。相手のクラスの代表を討ち取ったクラスが勝者だ。

試験召喚獣は戦争中の道具と思ってくれていい。

しかし雄二の提案は端から見れば無謀としか思えない発言である。

片や2学年の成績が悪かった人たちが集まったFクラス。

片や2学年の成績上位の人たちが集まったAクラス。

戦力の差は明白だった。

「そんなことはない。必ず勝てる、いや、俺が勝たせてみせる!」

しかし雄二は非難の嵐を撥ね退けるかのごとく言い放った。提案し
た僕が言うのもなんだけど、何か根拠があるのだろうか?

「このFクラスにはAクラスに勝てる戦力が揃っているからな。今
からそれを説明してやる!」

そうゆうと雄二は少し間をおいて、ある一カ所を見た。

「土屋。畳に顔をつけて姫路と風見のスカートを覗こうとしてない

でこつちに来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ！？」

「あらあら……」

「ゆ、幽香？……」

「？どうしたの明久？覗かれてないわよ？」

「……………くっ」

「いや、よく手を出さなかったな〜って……」

「…すぐに切れてると迷惑かけるもの……」

「そうか……」

まあ話は戻してつと、土屋は畳の跡を隠しながら雄二の元へと行く。

「こいつ、土屋康太は知る人ぞ知る人間、寡黙なる性識者だ」

「……………！！」

雄二の発言に、クラスのとよめきが走る。

彼は土屋康太という名前では別段有名ではない。だが、ムツツリ二ことなると話は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑の対象として挙げられている。

「ム、ムツツリ二だと！？」

「馬鹿な、奴がそうだというのか！？」

「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だ隠そうとしてい
るぞ……」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……」

「……………」

まあ男の子として仕方ないけど、盗撮とかはやめてほしいと思うよ
…友人として

「姫路の事は説明するまでもないだろう。みんなだって、その力は
知っているはずだ」

「えっ？ わっ、私ですかっ！？」

「ああ、主戦力だ。期待している。」

姫路さんは成績上位の人だから当然だね。

「そうだ、俺たちには姫路さんが居るんだった！」

「彼女なら、Aクラスにも引けをとらない」

「ああ、彼女がいれば何もいらぬ」

「あと風見幽香もAクラス並みの点数点数保持者だ」

「そうだ！幽香様がいた！！」

「ゆうかりいいいいいいん！！！！」

「明久…ねえあれヤツテイイ？」

「…ダメだからね？」

「藤原妹紅に関しても、古典、歴史関係はAクラス並みだ」

「…もこた〜ん！！！！」

「幽香の気持ちわかるかも…」

「アハハハ…」

「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす」

Aクラスの優子さんという双子の姉と演劇部のホープという要素で

有名な人物。そして、雄二は…？

「坂本って、確か小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが4人もいるって事かよ？」

もしかしたら、やれるんじゃないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

やっぱり雄二は人をまとめるのがうまいな…こういうところは悪友とし

て認めてるんだけど…

「それに吉井明久もいる！」

その瞬間、クラスの時間が一時停止した。やっぱり余計なひと言が

あるね…

静まりかえる教室…なんで僕の名前を言うかなあ。

「誰だ？ 吉井明久って？」

「知らねえよ。」

雄二の発言に上がりかけた士気が一気に下落する。まわりのクラス
メイトはざわつき始めた。

「そうか、知らないなら教えてやる。そこにいる奴が吉井明久で、

学園史上初の観察処分者だ。」

雄二は僕を指さして言わなくてもいいことまで言った。雄二の奴・

「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

まあ、普通そういう評価だよな……

「ああ、学年1のバカの屑だ」

そこまで言うかこのゴリラ……

「ほう……ゴリラ……そんなに燃やされたいのか？」

「そうね……肉片にして花の肥やしにしようかしら……でも花がかわいそうね……」

「し、しかし明久は教師の許可をもらって俺たちより召喚獣扱って分操作技術だけなら学年1だ」

「それってすごいのか？」

「ああ、盾くらいにはできる」

妹紅と幽香を止めてるのをいいことにひどい言いようだな……

「これだけの有名人が揃っているんだ。お前ら、勝って当然だろ？」

「そうだ！ これだけの人物がいるんだ！ 絶対勝てる！」

「もしかしたら打倒Aクラスも夢じゃない！」

「そうだ！ 俺たちに必要なのは座布団じゃない！ リクライニングシートだ！」

まずは俺たちの力の証明としてDクラスを征服したい。皆、この境遇には大いに不満だろ！？

「当然だ！！」

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！！」

「おおおおおっ！！」

「俺たちに必要なのは、卓袱台じゃない！ Aクラスのシステムデスクだ！！」

「うおおおおおっ！！！！」

「お、お……」

秀囲気に押され、姫路さんも懸命さが見て取れるように小さく拳を

挙げる。

何だろっ…僕には不安しかないよ…

第5話 戦力と観察処分者（後書き）

話のスピードが遅いな…

ここでの設定ですが、観察処分者のフィードバックは20%くらいとします。

思いつき次第次話を投稿します。

第6話 宣戦布告とUSSC(前書き)

幽香様降臨

第6話 宣戦布告とUSSC

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「待った雄二。下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね。そんな危険な役はごめん被るよ、僕は」

予想的中か…

「大丈夫だ、騙されたと思って行ってみる。俺は友人を騙すような事はしない。」

「いや、よく騙すでしょ？」

「…じゃあ私が行こうか？」

「さて藤原、お前が行ったら…」

「だって危険はないんだろ？それなら問題ないじゃないか」

「そ、それは…」

はあ、いくら嘘だってわかってても妹紅をそんなところに行かせたくないしな…

「わかったよ…じゃあ僕が行ってくるよ」

僕は宣戦布告の為に教室を出た。さっさとすませよう。

side 妹紅

「さすが明久だな。簡単に騙されやがる」

ゴリラがクククと笑ってやがる…やっぱり…

「やはりそんな魂胆じゃったのか、雄二よ」

「それ以外何があるんだ、秀吉」

ため息をはきながら木下はゴリラに言った。やっぱりこいつ燃やすべきかな…でも

「だったら残念だったな、ゴリラ」

「？ 何がだ。あとその呼び方はやめる」

「だって幽香がついていったからな」

「？どういう意味だ？」

まあ、明久もいるしそこまでしないだろう。

side 明久

さてDクラス前に到着した…

「待ちなさい、明久」

「あれ？幽香どうしたの？」

「私も行くわ」

本当は断りたいところだけど、まあ危険になったら庇えばいいか…

「失礼します」

「？誰、君」

ちようどいいや

「ごめんだけど代表呼んでもらえるかな？」

「いいわよ、平賀君」

「？なんだい」

「あ、えつとDクラスの代表ですか？」

「そうだけど…」

代表が疑わしい目でこっちを見てくる…さつさと言って帰ろう…

「えつとFクラスはDクラスに対して宣戦布告します」

「え？」

そりゃ驚くよね…

「おいお前ふざけてんのか？」

Dクラスの男子だろう…いきなりこちらを睨んできた。

それに従って複数人立ち上がってるし…ハア…

「てかさ、こいつって確か観察処分者じゃね？」

『ピクッ』

「あゝあのバカの代名詞の？」

『ピクピクッ』

「そうそう、人間の屑の代表」

『ブチッ』

あっ…

「じゃあかたずけても問題な「ねえ、貴方達…」なんだ？」

「代表と明久の話だから首を突っ込まないようしてたけど、貴方達常識ないの？」

ダメだ…笑顔なんだけど目が笑ってない…

「ましてや、さっきから聞いてれば明久の侮辱ばっかり…」

「お、お前何言って「私ね、自分のものが侮辱されるのはとっても我慢ならないの」「えっ、僕つてものなの?」「えっ、え?」

「ということで…いい声で鳴いてね」

「ちよっ、ま…」

side 妹紅

ぎゃあああああああああ…!!!

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

ものすごい悲鳴のするなか、私は落ち着いていた。

「やっぱりか…」

「…どういうことだ?」

「あいつはな自分のものに手を出されるのが大嫌いなんだ。おまけに…」

「おまけに?」

「USC(アルティメットサディスティッククリーチャー)、あいつの通称だ」

「え?だが学園ではそんな…」

「基本明久が押さえてたからな…だが堪忍袋も切れたんだろう、お
もにお前が原因で」

「…」
雄二としてはさっきの悲鳴は明久のものであつてほしいと思つたん
だろう…

するとドアが開いて…

「お、下ろしなさい／＼／＼／＼」

「下ろしたらまた暴れるでしょ？」

明久が幽香をお姫様だっこして現れた…いいな…

side 明久

ふう…なんとか被害を抑えることができた…

「大丈夫か？明久」

「うん、まあ幽香が暴れたので助かったよ…止めるのに時間がかつ
たけど」

「吉井」

島田さんがなんか腕を掴んでくる…てか、かなり痛い！！！！

「ちよつとさっきのどういふことが聞きた」「それより前に放せ（
放しなさい）」「わ、わかったから首掴まないで…」

「大丈夫か？明久よ」

「秀吉…うん大丈夫だよ」

なんか向こうでいざこざが起こつてるけど無視だ…

「それより坂本君、貴方…」

「よーし！ミーティングするから島田に土屋、姫路にお前ら、屋
上に行くぞ！」

あ、逃げた。まあ、あの状態の幽香を相手にしたくないのはわかる…
はあ、先が思いやられる…

第6話 宣戦布告とUSSC（後書き）

さて書き忘れてましたが慧音は職員室に戻っています、授業の用意で。

「ほう…忘れてるとはいい度胸だな…」

え？慧音さん…角が…てかなんで襟首を…

「教育的指導だ！…！」

いやあああああああああああ…！！！！！！！！

第7話 ミーティング（前書き）

後書きで投票があるのでよろしくです。

あ、あと妹紅の男口調とかですが、一応キャラがわかりやすいよう書くためにそうしています。原作では妹紅って女口調なんですよね〜あと、明久は東方キャラに対しては基本呼び捨てです。

第7話 ミーティング

「……………(サスサス)」

「ムツツリーニ。覗いてた時の畳の跡ならもう消えてるよ?」

「……………!!(ブンブン)」

「いや、今さら否定されてもムツツリーニがHなのは皆知ってるから」

「……………!!(ブンブン)」

「ここまでバレてるのに否定し続けるなんてある意味凄いと思う」

「……………!!(ブンブン)」

「何色だった?」

「姫路が水色、風見が…見えなかった(クツ)」

「いやそこまですらすら言えてる時点で…」

「?私のがどうしたの?(ニコツ)」

「……………次こそは…」

「明久じゃないと無理よ」

「え?」

ナニヲイダスンダコノヒトハ…

「だって明久、お風呂一緒に入ったことあるじゃない(ニヤニヤ)」

…うん…USCですわかりますorz

「何…だと…?」

「いやt「吉井、どうい「はいは話最後まで聞こうね」ちよっはな」…」

「まあ小さい頃の話だし、それ言ったら私だってあるしね。露天街あるし」

妹紅…それ庇えてない…

「皆の衆ここはどこだ?」

「」「」「審判の法廷」「」「」

「男とは…!」

「『！』愛』を捨て、『哀』に生きる者成りッ！」「『！』」
「これより審判を行う」

「ハイ、被告人吉井明久は風見幽香とお風呂に…」

「簡潔にのべたまえ」

「実にうらやましいであります！！」

『』『』『我等異端審問会の血の盟約の下、異端者に死をッ！！死を
ッ！！』『』『』

うわ…変な黒い集団が…ゴキ を思い浮かべてしまった…

「とりあえず、しになさい」

「とりあえず消えろ」

「『』『』『ぎゃあああああ！！！！』『』『』『』」

屋上に出ると、雲一つ無い空から眩しい光が差し込んでくる…
ムツリーニ…努力はいいけど…スカートの中を覗こうと頑張るの
はどうかと…

「さてと。明久、宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろし、僕達も各々その辺に
座る。

「うん、一応今日の午後の開戦予定と告げてきた」

「それじゃ、先にお昼ご飯って事ね？」

「そうなるな。だからしっかりと腹ごしらえしとけよ」

「明久、はいこれ」

幽香が僕の弁当を渡してきた。あれ？なんで…

「台の上に忘れてたわよ？」

「あ、そうかありがとう。危うく飯抜きになるとこだったよ」

「あの…」

「どうかしたか？」

「いや、風見さんと藤原さんのお弁当の中身が似てるんですけど…」

「そりゃ、明久が作ったからね（からよ）」

「まあ、たまに作ってもらったりしてるしね」

「そうですか…」

あれ…何だろう、気のせいかな？今一瞬、姫路さんの方からドス黒いオーラを感じただけけど…。

「で、どーゆー事なのよ吉井？」

「あの、島田さん。何故質問しながら僕の腕を極めようとするのかな？」

「いいからさっさと質問に 待って藤原さん、ウチの首は180度曲がったりしないから勘弁して欲しいんですけど…」

「だったら、とつととその殺気を引っ込めて腕を放してもらおうか？」

「っーか明久お前料理なんてできたのか？」

「それってどういう意味さ」

「お前去年、飯食ってなかったじゃねえか」

「一時期、昼飯を水と塩で乗りきってた事もあったしのう」

「……………舌が肥えてるとは思えない」

「そうね。絶対にあり得ないわね」

うわ…ひどい言われようだ…まあ事実そんな時期もあったけど…と
りあえずその時の慧音と永林の説教はきつかったと記そう…（
ガクガク

「すぐくおいしいわよ？」

「そうだな、私達もよく味見たのんでるし」

なんか褒められると、少し恥ずかしいな…

「あの、吉井君」

「ん？」

そんな中、さつきまで考え事をしてた姫路さんが口を開く

「宜しければ私のお弁当も食べてくれませんか？」

「え、どうして？」

「是非吉井君に味見をしてもらいたいです」

「いつ？」

「明日のお昼で良ければ」

「うーん、まあいいけど」

問題はないかな？

「……………ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井『だけ』に作ってくるなんて」

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「おお、それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

僕は小物系作ってくるかな……

「さて、明日の楽しみが出来た所で、話を戻そうか」

あ、そーいえば試召戦争のミーティングやってたんだった。すっかり忘れてた。

「雄二よ。一つ気になっていたんじやが、何故Dクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そーいえば、確かにそうですね」

「坂本君の事だから、何か考えがあつての事だと思っけど」

「まあな。理由は色々あるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ」

「え？でも僕達よりはクラスが上だよ？」

「確かに、振り分け試験の時点では向こうの方が強かったかもしれない。けど実際の所は違う。周りにいる面子をよく見てみる」
えーっと……

「うん。幼馴染みが二人と美少女が一人、親友が一人にバカが二人にムツツリが一人いるね」

どれが誰かは言わなくてもわかるだろう…

「誰が美sゲフツ」『ドゴツ』

「で、それがどうしたのかしら（ニコツ）」

何か言おうとした雄二を妹紅が殴り、幽香が話をそくした。

「ま、要するにだ。姫路に問題の無い今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目的である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いって事だ」

「？、それじゃあDクラスとは正面からぶつかるて厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「一応ちゃんと考えてたのか…」

「まあこれも打倒Aクラスへの必要なプロセスだからな問題ない」

内容が気になる所だけど、今は戦争に集中しなきゃいけないからね。ま、その時が来たら解るか。

「あ、あの！」

？どうしたのかな？

「ん？どうした姫路」

「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき明久に相談されて「それはそうと！」」

雄二は何言っかわからんから発言させるか！！

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味が無いよ？」

「心配いらん。負ける訳ないさ。お前達が俺に協力してくれるなら、どこが相手だろうと必ず勝てる」

「いいか、お前達。ウチのクラスは 最強だ」

聞いた限りかっこいいんだけど、心配ごとしかないのはなんでだろ
う…

第7話 ミーティング（後書き）

閻魔さまこと映姫に関してですが外見案で

1 幼女

2 明久と同じくらいの少女

3 お姉さま

結果は決まり次第お伝えします

第8話 Dクラス戦1（前書き）

PV1万突破：突破記念短編考えなきや

第8話 Dクラス戦1

side幽香

ついに始まったわねDクラス戦…

私は今Fクラスにいる。戦線に出ないのかって？明久から謹慎処分喰らってるのよ、仕方ないじゃない…

「……今前線部隊と敵が衝突中」

「状況は？」

「……今のところ互角」

Fクラスの一応リーダーである坂本は土屋から状況報告を受けている…しかし彼どうやって状況を調べてるのかしら…監視カメラや盗聴器は破壊したはずなんだけど…

「そっぴいや風見」

「何かしら？」

「お前、補給テストは…」

「ある程度だけど受けてるわ」

「…いつの間だ？」

「途中退席をした次の日よ。ああ、明久と妹紅も受けてるから問題ないわ」

まさか次の日に慧音と永林がテストを受けさせてくれるとは思わなかったわ…

どうも永林はそれについて慧音に連絡したみたいだね（プロローク2参照）

しかし暇ね…戦線に出たいけど謹慎喰らってるし…明久から喰らってるから破れないし…よし、日曜日の弾幕勝負で勝ったら明久に何頼むか考えよう…ふふ、そう考えると時間が足りないように思えるわ…

side 明久

どうもこの小説の主人公こと明久です。え？出だしがおかしいって？H A H A H A何を言ってるのさ

「明久、お願いだから現実に戻ってきて」

「ハイ」

ただ今の現状

『さあ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌だあつ！！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるか分からんが、たつぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？そんな事はしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるう』

『それは教育じゃなくて洗脳…だ、誰か、助…イヤアアア（ボタン、ガチャ）』

やばいすごく逃げ出したい…

「ところでテストやっぱり適当に受けたの？」

「妹紅口調昔みたいになってる。周りにとって僕は『勉強のできな
い観察処分者』だからね。」

「誰も聞いてないから問題ないわよ…でもどうするの？」

「やるしかないでしょ、ちょうど古文だしいくよ！妹紅」

「…はあ、わかったわよ…いくぜ、明久！！」

「Fクラス吉井明久と」

「藤原妹紅！」

「ここにいるDクラス全員に対して、勝負を申し込む！！試験召喚獣召喚！！！！！！」

僕達が手を合わせるようにあげると足元から、魔法陣というべきだろうか：幾何学模様の図形が現れ、その後召喚獣が姿を現した。

僕の召喚獣は改造学ランに木刀を持った犬耳に尻尾がついたデザイン、妹紅が、ワイシャツにもんぺを穿き（早い話元の妹紅の格好）、白猫の耳としっぽがついたようなデザインだ。

「いくよ！」

「いくぞ！」

「たかだかFクラス二人だ。一瞬でつぶすぞ！！」

「ましてや一人は観察処分者！！」

古文

Fクラス 吉井明久 62点

Fクラス 藤原妹紅 317点

VS

Dクラス モブ×10人 平均101点

「……な、何だあの点数！！？」「……」

「ちえ、やっぱちゃんときなかつたから400点行かなかつたや」

「でも高得点には変わりないよ」

「ひ、ひるむな！！数でつぶすぞ！！」

「……お、おう！！」「……」

「そんなに甘くないっての」

妹紅はてのひらから火を出し、それをばらまいた…

「……ぎゃあああああ！！！！！！」「……」

Dクラス4名 0点 戦死

やっぱすごいな…おっと

「妹紅危ないよっと」

僕は妹紅の後ろから襲おうとした二人に対して足を引っ掛け、一人は首、一人は心臓付近を切りつけた

Dクラス2名 0点 戦死

「え・・・なんで？」

どうも召喚獣も人と同じようで人体急所を攻撃すると差がひどくない限りは一撃で倒せるみたいだ：

同じ要領であと4人を倒し「戦闘描写すらかなしかよ！！」「

「ハイハイ鉄人お願いしますね」「いやあああああああ！！！！」「前線部隊はまだ先みたいだしな：よし、

妹紅：

「なんだ？」

「前線部隊のところまで行く間にどっちが多く倒せるか勝負しない？」

「お、それ楽しそうだな。じゃあ私が勝ったら今日の晩飯慧音と一緒に食おうぜ」

「？いつものことじゃ...いいんだよ」「そう、じゃあ...」

「くそ、こいつらなめてんのか？」

妹紅：

「おう」

「ゲームスタートだ！！」

なんか、弾幕勝負を思い出すな...

あ、日曜幽香に弾幕勝負挑まれたの思い出しちゃった...orz

第8話 Dクラス戦1（後書き）

フラグ（いろんな意味で）回収とちよつとですが、明久のことが
出ましたね〜

明「まだ内緒ごとはあるんだけど後に書くんでしょ？」

書けるかな・・・（遠い目

明「ちよつと!?!?」

PV1万記念短編 向日葵の記憶(前書き)

3000で14000越えて…

題名から誰のことかわかるかもしれませんがどうぞ

P V 1万記念短編 向日葵の記憶

それはホントに偶然だったのかもしれない……でも私は後悔していない……

それはホントにただの気まぐれだった……

「さて水をあげに行こうかしらね」

私はいつものように向日葵畑に出た。

「あら？」

するとそこには5、6歳くらいだろうか、茶髪の少年が空いた場所に座り込んでいた……

いつもなら追い返すけど、今日はなんだか気分がいいし……話しかけてみようかしら……

「あら？人間の子供がなんのようかしら？」

「え……」

いきなり声をかけられたことに驚いたのだろう……その子はびっくりしたように振り返った……

「……」

見ようによつてはかわいらしい顔立ちだろうか……しかしそれよりも私が見入ったのは……その瞳だった。

濃いめの茶色……どこにでもいそうな色だったが、

深かった……まるで吸い込まれるような……すべてを見透かされるような……そんな瞳をしていた……

私はそれに見惚れ、そして恐怖した……

こんな子供が……ここまで深い思いを瞳にうつせるものなのだろうか……

「お姉さん誰？」

「いけない…思考にふけるとこだったわ…」

「名前を聞く場合、自分から言うのが礼儀ってものよ？」

「あ、それもそうか…ぼくは吉井明久っていうんだ」

「明久ね…私は風見幽香よ」

「へ〜」

どうも名前を知らないみたいだし…外来人かしら…

「明久、気をつけたほうがいいわよ？」

「何を？」

とりあえず…

「ここにはね…とっても怖い妖怪が現れるのよ」

「じゃあ、ここを出なきゃかな…」

「そうね…だから早く…」こんなところで妖怪現れたらはお花がかわいそうだもんね「え？」

この子なんて…

「前ね、蜘蛛の妖怪に襲われたんだけどすごくでかくてね、あんなのが現れたらお花さん倒れちゃうよ」

聞き間違いじゃないか…しかしこの子はバカなのだろうか…自分のことより花を心配するなんて…

でも…

「じゃあ、またねお」「まちなさい」？」

「私の家すぐ近くだし、お菓子食べに来る？」

「え…でも」

「大丈夫よ、妖怪が来ても私が追い払うし（まあ、自分のことなんだけどね）」

「う〜ん、じゃあ行こうかな」

笑顔で喜ぶ明久…ふふ、まあ、いい暇つぶしにはなるでしょうね…

それから明久はちよくちよくとこの遊びに来るようになった…そして、いつの間にか私も明久が来ないかと楽しみになっていた…

でも、ある意味予想できて、起こってほしくなかったことが起きた…

「新しい妖怪が幻想入りした？」

そうそれは明久と会って数カ月たった時、八雲紫の一言が始まりだった…

「そうなんだけど、どうもこの妖怪ね、人の話を全く聞かないのよ

…」

「なんでそんなのを…」

「まあ、そんなだから気をつけてね」

あ、逃げた…

昼頃…

早く行かないと…今日は明久が向日葵畑で待ってるんだった…

その時、私は気づいてしまった…向日葵畑に感じたことがない妖力を感じることに…

(まさか!!朝紫が言っていた妖怪!?急がなきゃ!!)

そこに着くと、明久とあれは…鬼?でもなんか違うような…

「コドモ、ウマソウナコドモ。」

その鬼?はまるで踊るかのようにはしゃいでいた…あ…

「な、やめろ!!花が傷つくじゃないか!!」

「ハナ?コレ?ジャマクサイナ…」

その妖怪は向日葵をまるでごみをのけるかのごとく、棒でなぎ払った…

あの妖怪…クロス…

私は、あのごみを消すために傘を構えようとした…

「…やめろ…」

『ゾワッ』

「「!?」」

な、まさか私が一瞬死を覚悟するなんて…何!?

「この花達は幽香が毎日頑張って育てたものなんだ。それに気安く触れるな!」

「……………」

明久の茶色だった瞳は、青く、蒼く…あわく虹色に輝いていた…周りを包むような殺気。でも矛盾して周りを守るように包み込む優しい雰囲気…

ああ、そうか…

「フ、フザケルナアアア!」

妖怪は明久に恐怖したことが許せなかったのか、明久に飛びかかった…

『ガツンッ』

「なっ!?!」

しかし…棒を振り下ろすもそれは…私の傘によって止められていた…

「ナ、ナンデオマエモヨウカイナノニ…」

「ええ、確かにそうね…でもあなたは私の育てた花を傷つけた…」

私は…相手に向けて傘をつきつける…

「ましてや…私のモノに手を出したんだから…」

「覚悟はできてるわよね?」

「ヤ、ヤメ……」

「…消えなさい…」

「マスタースパーク…」

「あれ?」

「あら？起きたの？明久」

「えつと・・・なぜ僕は膝枕されてるのでございましょうか？」
時折この子の思考がわからないわね・・・

「貴方、私が来なかつたらどうする気だったのかしら？」

「あ、そうか僕妖怪に襲われて・・・」

「ねえ、明久・・・」

「なに？」

「これからも貴方は多分妖怪から襲われかけたりすると思うの」

「うん・・・」

「だから・・・逃げる手段として私が特訓してあげるわ・・・」

「えつ・・・」

ふふふ、なんか不思議な気分ね・・・

「ちなみに拒否権はないわ・・・明日の朝から始めるからちゃんと来なさいね？」

「・・・はいorz」

ほんと明日から楽しみだわ。

思えば、この時・・・いや、明久を見つけた時から、私は明久だけを見ていたのかもしれない・・・

「・・・夢・・・みたいね」

はあ、まさか明久と会ったころの夢を見るなんて・・・／／／／
でも、もうあの頃から明久は力に目覚める兆しがあったのよね・・・
今日は始業式だし、明久を起こしに行こうかな・・・

「おじやまします。明久、起きなさい」

.....

まだ寝てるみたいね・・・

私は明久の部屋の行こうとしたとき、リビングにある花に気づいた…
「…ふふ」

それは昔、明久にあげた花…あげた時から今まで植えかえしながら、
ちゃんと育てているらしい。

胡蝶蘭…清纯、純粹という花言葉を持つ花…

でも、明久のことだからもう一つの意味には気づいていないだろう

…この花をあげた本当の意味に…

もう一つの花ことば、それは…

あなたを愛しています

PV1万記念短編 向日葵の記憶（後書き）

どうでしたでしょうか…

ちなみに時期的には第1話の直前です。

ちなみに向日葵の花ことばには「私の目はあなただけを見つめる」というのもあるそうです

第9話 Dクラス戦2（前書き）

とうとう彼女が…うまく書けるかな…

第9話 Dクラス戦2

明久と妹紅が勝負をしている頃前線部隊では、

「さすがに押されてきたわね…」

「そうじゃのう…仕方ない…みな、助けが来るまでなんとか耐え凌ぐのじゃ…！」

「…「イエツサ…！」…！」

美波と秀吉が指揮をとり何とか耐え凌いでいた…

「あ、そこにいるのはもしかや美波お姉さま！五十嵐先生、こっちに来てください！」

戦場に響き渡る声に、美波は顔色を青くする。

「くっ！ぬかつたわ！」

螺旋状のツインテールの女子生徒がこっちに走ってきた。しかも相手はすでに召喚獣を呼び出している。

「お姉さま…私はお姉さまから捨てられた日から何が悪いのか考えたんです。そしてわかりました、お姉さま私はお姉さまだけを愛しているということ…！」

「美春…だから言ってるでしょ！！ウチは普通に男が好きなんだって…！」

「いえ、お姉さまも美春のことを愛してるはずです。ただ美春がお姉さまだけを愛さなかったから美春を捨てたのでしょう。だからここで言います、美春はお姉さまだけを愛してます」

「人の話を聞いてないでしょ！？あなた」

「…なんじゃろうか…帰ってもよいか？」

「き、木下！…手伝いなさい！！」

「はあ…しかたな「殺します…邪魔するものは殺します…」本気で帰ってはだめか？」

「き、木下…!?」

「では、お姉さま行きます！！試験召喚獣召喚」

「あくもう、試験召喚獣召喚」

科学

Fクラス 島田美波 52点

VS

Dクラス 清水美春 78点

このままではやられてしまう。そしたら補習室に……

「い、いや！ 補習室は嫌っ！」

このまま戦えば訪れるだろう未来に焦りを感じ、美波の召喚獣の攻撃が単調になる。攻撃を先読みした美春が避けて一撃を与えた。

戦死した、と思った美波であったが

「え？」

島田美波 6点

点数が僅かに残った。どうしたのか困惑していると

「フッフッフ……」

『ガシッ』

突然美春が美波の腕を掴み補習室とは違う方向に連れて行くこととしていた。

「ちょっと！ どこに連れて行くこととしているの！」

「どこに？ 愚問ですわ、お姉様……」

ゆっくりと美春が美波の方を向いて

「今なら保健室には誰もいません！ さあお姉様！ 美春と共に大人の階段を上りましょう！」

目を爛々に輝かせて言った。美波は顔から血の気が引いていくのが分かる。

「いやよ！ 前から言っているけど、ウチは普通に“男”が好きなの！」

「大丈夫です、お姉様！ 初体験は怖いかもしれませんが、美春が手取り足取り気持ちよくしてあげますわ！」

「い、いや！」

「無駄ですわ、お姉様。他の豚野郎どもはあの通り、豚同士で争っていますわ。助けなど来ません！」

美春の言うとおり、他のFクラスはDクラスの相手をしていて助けにいけない。秀吉もいつの間にか現れたDクラスの生徒に苦戦している。このままでは自分の貞操が危ない。でも、どうすればいいの

か。八方手詰まりだった。それでも誰か助けしてくれると信じて美波は助けを求めた。

「た、助け……」

「さあ、美春と一緒に……」「邪魔だ……！どけ……」「え？」

いきなり現れた召喚獣に切り裂かれ、ついでのごとく燃やされ美春の召喚獣は……

清水美春 0点 戦死

「な、何が起こったのですの？」

その先の戦場では、

「ははは、燃えろ……！」

「……ぎゃあああああ……！！……！！……！！」

「……斬る……」

「……うわあああああ……！！……！！……！！」

「戦死者はほしゅうつうつう……！！」

「……いやあああああ……！！……！！……！！」

明久と妹紅の召喚獣によってどんどん倒され、鉄人に補修室に運ばれるDクラスの面々だった……

side 明久

とりあえずここにいた相手は全員倒したかな……

「よし、明久……！討伐数を確認するぞ……！！」

もこた……妹紅……討伐数……つて……

「えつと僕は17人かな…」

「…やったあああ!! 勝った、18人!!!!」

「うん、おめでとう」

「明久、約束だからな!!」

「ふふ、わかってるよ」

妹紅たら子供のようにはしゃいでるや…

「明久、たすかったぞい」

「あ、秀吉。気にしないで」

気づいてなかったなんて言えない…

「よ、吉井…」

「し、島田さん？」

「とりあえず助かったわ」

そこには燃えつきかけた島田さんがいた…

第9話 Dクラス戦2（後書き）

なんていうか…突破短編で燃え尽きた…
ちなみにですが、短編のほうには明久の能力の一つが少しだけ出
ます

第10話 Dクラス戦ラスト あとはよろしく(前書き)

私的事ですが・・・

空の境界は神作品だと思う!!!

第10話 Dクラス戦ラスト あとはよろしく

Dクラス付近

さすがに点もやばくなってきたな…

「明久、どうする?」

「僕たちはまだ問題ないけど、さすがにみんながやばいね…」

「おい、やばいぞ!! Dクラスの野郎船越先生を呼んできてやがる」

船越先生といえは数学・・・くっ、点数的にもうみんなやばくなってるはず

「須川君何とかして船越先生の進行を止めるんだ!!」

「了解」

これが成功するかしないかで現状も変わるはずだ!!

side 雄二

風見が手洗いに行っている間に暇だな〜と思っていると須川が教室に入ってきた。

「坂本」

「? 須川どうした? 逃げてきたのか?」

「いや、吉井から船越先生のDクラス行きを止めろ、と言われたんだがどうしたらいい?」

「そりゃ、放送で…」
そう言えんば…ククク、ちょうど風見もないことだし、
「須川、……………」
「……………」と放送で流せ(ニヤリ)
「……………」
ククク明久がどんな目にあうか楽しみだ

雄二が死亡フラグを立てているころ

side 明久

『ピンポンパンポーン』
《連絡致します》

あ、なんか声変えてるけど須川君か？放送とは考えたね。

《船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい》

よしこれでみんなの補給テストの時間が作れ……

《吉井明久君が体育館裏で待っています。なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「……………」

船越先生

数学担任の45歳独身

仕事にのめり込み過ぎて婚期を逃してしまい、遂には男子生徒達に
単位を盾に交際を迫る様になったと噂の人・・・

「な、なんてこつた・・・Fクラスの野郎ども勝ちにきてやがる・・・」

「くそ、自分の身を捨てるなんて、こんな奴らに俺たちは勝てるのか？」

なんかDクラスが言ってるけど無視だ！！ヤバイヤバイヤバイ！！！！

《繰り返・・・『ドゴーンッ』なっ！！え、ちょ、やめ・・・》

『ぎゃあああああああああ！！！！』

「」「」「」「」「」「」「」「」

《・・・コホン、さっきの放送に訂正を入れるわ。船越先生、体育館裏に須川を置いておくから好きにしていいわよ》

()()(須川お前のことは忘れない・・・)()

《あと・・・坂本雄二・・・クビヲアラツテマツテオキナサイ！！！！》

あ、雄二終わったな...

「明久、私も行っていいかしら？(ニコッ)」
「妹紅・・・ダメだよ・・・」

今は戦争に集中しよう・・・

「吉井!!」

「横田君?どうしたの?」

「(な、名前が出た) Dクラスの代表の隊が、隙を見てFクラスに向かっているらしいぞ!!」

な、さつきに放送で見逃してしまったか!?

「みんな!!急いでFクラスに戻るよ!!」

「了解!!」

Fクラスに戻ると・・・

「.....」

「チョット、マッテモラエルカシラ?」

「はい」

すごい笑顔の幽香と、

ぼろぼろで虫の息の雄二と、

幽香の殺気おびえているDクラス代表の隊がいた…

「え、え〜っと」

「あ、え、Fクラスの先行隊も戻ってきたみたいだが、さすがにこの人数に相手は無理だろう？」

あ、代表として何とか立て直したね。

「確かに僕たちじゃ無理だね」

「なら「だから、」ん？」

「姫路さん、あとはよろしく」

僕と妹紅がそう言つと

「あ、あの・・・」

平賀君（Dクラス代表）の後ろから、申し訳無さそうに姫路さんが肩を叩いた。

「え？あ、姫路さん。どうしたんですか？Aクラスはこの廊下を通らなかったと思うけど・・・」

「い、いえ、そうじゃなくて・・・」

「？」

「え、Fクラスの姫路瑞希です。えっと、宜しくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス平賀君に現代文で勝負を申し込みます」

「はあ……、どうも」

「あの、えっと……さ、サモン試験召喚獣召喚です」

「え？あ、あれ？」

平賀君、驚いてて頭が追いついてないな・・・

現代文

Fクラス 姫路瑞希 345点

VS

Dクラス 平賀源二 128点

「じ、ごめんなさい！！」

姫路さんの召喚獣は平賀君の召喚獣を大剣であっさりと、斬ってしまった。

こうして、Fクラスの勝利は決定した。

第10話 Dクラス戦ラスト あとはよろしく(後書き)

ふう、なんとかここまで書けた・・・

あとは戦後対談だ

戦後対談には少し日常編を入れる予定です。

第11話 Dクラス戦 戦後対談（前書き）

今のところの優勢ですが

台詞の前には名前をつけない

映姫の外見は明久くらい

です。まだまだ投票は受け付けてるのでしょ。

第11話 Dクラス戦 戦後対談

戦後対談したいんだけど…

「……………」(ボロボロの雄二)

「フフフフフフ……………」(目が狂気に染まってる幽香)

……………これ、どうしよう……………

「えっと……………」

「あ、平賀君ちょっと待っててね」

「あ、ああ」

さて、まずは……………

「妹紅、幽香を止めるから雄二を起こして」

「……………とどめさしちゃだめ？」

「今はいる人間だから普通に起こして」

「……………わかった」

さて……………

少年少女作業中

Dクラス

「……………」(只今、明久に後ろから抱きかか

えるように抑えられている)

「(いいな・・・)」(その状況をうらやましそうに見ている)

「(はあ、明久に奴は...)」(FFF団を押さえながらもちよっとうらやましそうに見ている)

「ちよつ、ふ、藤原さん。あ、足ほどいて・・・」(明久に尋問しようとしたところを妹紅に四の字固めされている)

「.....」(呪呪呪呪呪)「.....」(明久に襲いかかりたいが慧音がいるため出来ない)
「.....」

うん、カオスだな(お前が言うか!? by 作者)

「え、えつと・・・」

「あれは無視しろ・・・」(気絶していたところを、妹紅に思いっきり腹を蹴られて悶絶しながらも復活)

「あ、ああ」

「じゃあ、対談と行こうか・・・」

でもよく雄二、幽香の攻撃に生き残れたな...やっぱり前より幽香、手加減うまくなったのかな?

「まさか姫路さんがFクラスだったなんて・・・信じられん。」

気を取り直したように平賀君がつぶやいた。

「あ、その、さっきはすいません・・・」

別の方向から瑞希が駆け寄って行って源二に頭を下げる。

本来なら謝る必要はないのが、それでも瑞希は頭を下げる。

「いや、謝ることは無い全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが悪いんだ。ルールに則ってクラスを明け渡そう。今日は時間がないから明日でいいか？」

これで彼は今後最低3ヶ月は最低のFクラス負けた、ということでもクラスメイトに恨まれながら過ごす羽目になるが、

「いや、その必要はない。」

雄二はそう言い放った。

「何？」

「Dクラスの設備を奪うつもりは無いからだ。」

雄二の言葉に全員が目を丸くした。

「みんな、忘れたか？俺たちの目標はあくまでもAクラスだ。だからDクラスの設備には手を出さない。」

「それはありがたいが……いいのか？」

「もちろん条件がある。俺が指示したら窓の外のをあれを動かなくしてもらいたいんだ。」

そう言って雄二が指差したのはBクラスのエアコンの室外機だった。

「あれか。」

「設備を壊すから教師に睨まれるだろうが悪い取引じゃないだろ？」

まあ、そうだろう。うまくやれば嚴重注意だけですむのだから。

「分かった。その提案を呑もう。」

「そうか。タイミングは後で話す。今日はもう帰っていいぞ。」

交渉は成立した。

「ああ。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ。」

「はは、無理するな。勝てっこないと思ってるんだろ？」

「はは、そうだ。FクラスがAクラスに勝てるわけがない。ま、社交辞令だ。」

そう言うと源二は去って行った。

「さて、みんな！今日はご苦労だった！明日は今日消費した点数の補充を行うから今日は帰ってゆっくりしてくれ！解散！」

その言葉でみんながワラワラと帰り支度を始めるため教室に戻っていく。

「さ、帰ろうぜ明久」

「あ、うん。帰ろうか」

「そ／／／そうね／／／／」

僕たちは帰路につくのだった・・・

慧音&妹紅宅（正確には部屋かな？）

「ただいま」

「あ、慧音おかえり」
「ただいま、妹紅。うん？明久がいるのか？」
「ああ、今ご飯作ってる」
「そうか、じゃあ着替えてくるかな」
「おう。私は手伝いしてくるよ」

リビング

「「「いただきます」」」

「今日は明久悲惨だったな・・・」

慧音の一言で今日の放送を思い出してしまった・・・

「慧音・・・それは言わないで。ホントにヤバいつて思ったから・・・」
「ああ・・・もうちょっと力こめとければよかった・・・」
「いや・・・ダメでしょ・・・」
「さすがに限度つてもんがあると思うぜ？あのゴリラのはふざけてるにしても度が過ぎる」

「（ふむ、原因は坂本か・・・）まあ、船越先生には隣の草部さん（49歳独身）を紹介しといたから大丈夫だろう・・・」

「・・・」
「ん？どうした？明久」

「あ、ありがとうけいね〜！！！！」

『抱きッ』

「なっ、あ、明久／＼／＼／＼」

「（いいな・・・）」

「うう・・・」

「・・・もう・・・」（なでなで）

キングクリームゾン！！

「・・・ごめん取り乱しちゃって・・・」

や、やばい。つい安心から慧音に抱きついてしまった・・・

「まあ、気にするな／＼／＼」

「そうそう。あれは仕方ないよ」

「うん・・・」

「明日は・・・補充試験をやって終わりかな？」

ご飯も食べて二人でゲームしていると、妹紅がそんなことをつぶやいた

「うん、たしかそれだけじゃなかったかな？」

「だったよね」

「あ、そうだ。明久、妹紅、幽香にはもう伝えているが、明日の弁当は私が作るから楽しみにしている」

「やった」

「うん、楽しみに待ってるよ」

さて時間はつと・・・

「時間も時間だしそろそろ帰ろうな・・・」

「え、泊ってて構わないわよ」

やっぱり家だと口調も崩れるみたいだね・・・

「え、でも」

「ん？私もかまわないぞ」

慧音・・・先生としてそれはどうかと・・・
でもま・・・

「じゃあ泊っていいのかな？」

そのあと、妹紅と慧音とでゲームをしてリビングに布団を敷いて寝
た・・・

ホント、なにか忘れているような・・・

第11話 Dクラス戦 戦後対談（後書き）

おまけ

朝・・・

「・・・」(チラッ)

「・・・」(スウ・・・) (右 慧音)

「・・・」(スウ・・・) (左 妹紅)

「・・・」(スウ・・・) (左 妹紅)

第12話 恐怖！大量殺戮科学兵器（前書き）

つ、ついにあれが…

第12話 恐怖！大量殺戮科学兵器

慧音& amp ;妹紅宅 朝

何とか二人の拘束から抜け出した僕は、

「昨日は出来なかったからね…」

ベランダで座禅をしていた。

本当は身体を動かしたいけど…さすがに無理だからね、イメージトレーニングだけでも…

数時間後

「明久、ご飯食べよ」

「あれ、もうそんな時間？」

妹紅の声によって空想世界から現実に引き戻される。

「慧音は？」

「明久の邪魔しちゃ悪いからって声かけずに行ったよ」

「そう…まあ、ご飯食べようか」

「うん」

その後、幽香を呼んで僕達は学校に向かった。

キングクリームゾン!!

お昼

なんか作者の陰謀を感じた…

「明久、行くぞ」

いけない、話を全く聞いてなかった…

「行くつて、何処に？」

「吉井…あんた今日姫路さんから試食頼まれてるの忘れたの？」

「「「あ、ああ「「「

「つて、お前らもかよ」

「でもどうしようか、明久」

「そうよね…」

「ん？お前らどうかしたのか？」

『ガラッ』

「あ、藤原さん達、ちょうどよかった」

タイミングよく慧音がやって来た。

「はい、藤原さん、風見さん」

「「ありがとう」」

「なんだ、お前ら上白沢先生から作ってもらったのか？」

「一緒に住んでるしね」

妹紅達に弁当を渡した後慧音は僕に近づいてきて、

「はい、吉井君の分です」

「ありがとうございます。上白沢先生」

「……なつ、何だと?!?!?」「……」

みんな何驚いてるんだろう?

「吉井……」

「…何かな? 島田さん」

「どういうことかしら?」

「い、いや足を掴みながら聞く事じゃ……」

「大丈夫よ、いっ「大丈夫じゃないからはなせ……」わ、わかったから
はなし……」

た、助かつ……

「……」手作り弁当……」

「……」妬ましい」

「……」異端者には死を!!」「……」

「ハイハイ、ジャマヨ」

「……」ぎゃあああああ!!……」

このクラスは本当に大丈夫なんだろうか……

「…あ、てがすべった」

『バツ』(雄二が弁当を叩き落とそうとする)

『パシッ』（慧音がその手をキャッチ）

「えっ」

『ドガッ！！』（一本背負い）

「げふ…」

「いけませんよ？坂本君」

「アハハハ…」

時間は消し飛ぶ！！

屋上

「では皆さん、どつぞ」

試食するって言った以上食べないとね。

「……………いただき（スッ）」

「あ、ムツツリーニ意地汚いぞい」

『パクッ、ドサッ！』

…えっ…

「どうかしましたか？」

「（スクッ）…『グッ』」

「あ、そうですね」

…

(あれどう思っ?)

(わざと…じゃないな…)

(ていうより…)

やっぱり気のせいじゃないか

()(この弁当…薬品臭が…)()

「さ、あ、明久早く喰えよ」

「な…」

雄二の野郎わかってて…

(逝ってこい)

「さあ、吉井君どうぞ」

「え、えっと…」

「ドウゾ…」

姫路さんの目からハイライトが…くっ…

た、助けて！えーりん！！

『ガチャ』

「なんか吉井君のHeipがきたから登場」

頭に浮かんだ言葉を心の中で叫んだら永琳が来た。

「や、八意先生…どうしたんですか？」

さすがに永琳の登場に雄二達も驚いているようだ

「…」

状況確認中

「姫路さんだったわよね？弁当に何入れたの？」

「え、えつと酸味が足りなかったの…」

「硫酸を…」

……は？

「…試食は？」

「食べたなら太るのでしてませんよ(ニッコ)」

『ブチッ』

「ちよつと姫路さん、こつち入いらっしやい…」

「え？先生？」

『ズルズル』

「」「」……「」「」

『きゃあああ……』

「……とりあえずご飯食べようか」

「うん」

「そうね」

うん、姫路さんに料理させたら危険だ…

第12話 恐怖！大量殺戮科学兵器（後書き）

まさかの永琳登場。

まだまだ続く。

第13話 日常？（前書き）

幽香の召喚獣の腕輪の能力どうしよう・・・
妹紅のは考えたんだけど・・・

第13話 日常？

まさかの永琳の登場により命の危機を脱した僕であるが・・・

「さて・・・吉井、八意先生とはどういう関係かしら？」

「あと、上白沢先生もです」

島田さんと姫路さんに（悪いほうで）迫られ、

「「「「あんな美人の先生達と知り合いとは・・・」」」」

「「「「うらやま・・・恥と知れ！！！」」」」

「多数決を取る、ここで死刑とする・・・」

「「「賛成！！！！」」」

FFF団に囲まれ…僕は十字架に縛られている・・・

幽香と妹紅は慧音からの頼まれごとでないし、やばいな・・・

くそ、あそこでニヤついている雄二がむかつく

「「「ちゃんと躡しなきゃよね（ですよね）」」」

いや僕は悪いことしてないし、二人のペットでもないし

「「「「異端児には死を！！！！」」」」

君たちは黙ってる

「明久」

「何さ・・・雄二」

「今だから言っておく」

？

「俺はお前の幸せがとつても大つきらいだ!!」

「あんた最低だな!!!」

どうする・・・

「では火W「貴方達・・・何をしているのかしら？」へ・・・？」

「「「「あ・・・」」」」

「私言つたよな・・・明久に手を出したら容赦しないって・・・」

Fクラスの入り口には不死鳥の雛と・・・USCが立っていた・・・

数分後

「明久、大丈夫か？」

「あ、うん縛られただけだからね」

目の前にはFクラスだった物の山・・・あ、雄二原形すらとどめてない。

「ロープ解くぞ〜」

「うん、わかった」

はあ、やっと解放される・・・!?

「も、妹紅ちよつとま・・・」

幽香が姫路さんと島田さんを睨んでて前に・・・ダメだ、気づいていない!!

「え?」

『シュルツ』

現実とは無情にもひもは解け・・・

僕は・・・

「幽香危な・・・」

「え?」

『ドサツ。ポフツ』

幽香を押し倒すように倒れた・・・

はて、何か柔らかいものが・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっと・・・・・・・・」

・・・うん・・・現実を認めよう・・・

これは・・・幽香の胸だ

「／／／／！！？／／／／／」

『ドンッ』（幽香が明久を弾き飛ばし）

『ビュン！』（蹴りを放つ音）

僕が悪いのはわかってるけど、平手じゃなくて蹴りってどつなのよ・

『ゴツグシヤッ！！！』

あ・・・し・・・

・・・なんか後頭部に柔らかいものが・・・

あ、僕死んでなかったんだね・・・

「ここは・・・」

「あ、明久おきたのね」

「幽香？」

「その・・・さっきはごめんなさい。いきなり蹴り飛ばして・・・」
「気にしないで。僕が悪いんだし、それより・・・」

なんていうかちょうど胸（ゲフン、ゲフン） 幽香を見上げるよう
な感じになってるけどもしかしてこれ・・・

幽香を見上げている + 後頭部に柔らかい感触〓膝枕OK？

・・・

「あ、動いちゃだめよ、永琳いわく一応安静にきなさいらしいから」
「でも・・・」

あれが・・・

「大丈夫、妹紅が牽制してるわ」

向こうを見ると、僕に飛びかかろうとしているFFF団と姫路さんと島田さんを妹紅が足止めしていた
あ、雄二ニクノカタマリが動いた

「じゃあもうちょっと休むよ」

「ええ、おやすみなさい」

・・・

時間はけし飛ぶ！！

学校終了後

三人で帰宅中

「あ、いけね・・・筆箱教室に忘れてきちゃった」

「まっところか？」

「いや、先に帰ってて大丈夫だよ」

「わかったわ、とりあえず急いでね」

さてと、学校に戻らなきゃ・・・

少年移動中

Fクラス

『ガラッ』

「筆箱はっ」と

「よ、吉井君!？」

「あれ？姫路さん？」

どうしたんだろう・・・

「どどどどどどどどどどーしたんですか？」

「いや、筆箱を忘れたから取りに・・・何でそんなに慌ててんの？」

「べべべ別に慌ててなんかいませんよお!？」

い、いや嘔みすぎだから・・・

ふと姫路さんが座ってる席(ちゃぶ台)を見ると、卓袱台の上に何やら可愛らしい便箋と封筒が。

「あ、あのっ、これはっ、その　ふあっ!？」

あ、こけた。

?これは手紙?

《貴方のことが好きです》

えーっど……、これは俗に言うラブレターという奴……だよな?実在したんだ…。

「えつと・・・」

「／／／／／／／」

まあ誰かに送るってことだよな、秀吉かな?まさか・・・雄二?

見たものは仕方がない、素直に聞こう

「その人のどこがいいの?やっぱり外見？」

「あ、いえ。外見じゃなくて、あつ、勿論外見も好きですけど!」

「へえ、そりゃ羨ましい限りだね。外見に自信の無い僕にとつては」

「えっ?どーしてですか!?とつても格好良いですよ!私の友達も結構騒いでいましたし!」

「え?ホントに?随分酔狂な友達なんだね」

自分で言うのもなんだけど

「良く分からないんですけど、吉井君が坂本君と二人でいる姿を見

ては『遅しい坂本君と美少年の吉井君と一緒に歩いてるのって絵になるよね』ってよく言っていました」

「び、びしょ？はは…、何か照れるな。お世辞でもうれしいよ」

「『やっぱり吉井君が『受け』なのかな？』とも」

「前言撤回。その友達とは距離を置こう。姫路さんにはまだ早い」

「婦女子なのか！？」

「それに…」

「……まだ何か？」

「『吉井君って女装が似合いそうだよ』とも」

「姫路さん、その友達とは今すぐ縁を切ろう。間違いなく君を駄目にする」

「私も最近、何となくそう思えて来ました」

「しつかりするんだ姫路さん！君はそっち側に行っちゃいけない！」

やめてくれ！！仕事だから我慢して女装したことはあったけど、精神的にあれはきついんだ！！

いかん！！話を変えねば

「そ、それにしても姫路さん、外見『も』って事は、中身が良いの？」

「あ、えーっと……………はい……………」

なんとかそらせた…

「その人のどんな所が良いの？」

「や…、優しい所とか……………」

「優しくて、明るくて、いつも楽しそうで……………、私の憧れなんです」

強い思いを瞳に感じる・・・ほんとに好きなんだな・・・

さてと筆箱ももう回収してるし、あとは帰るだけなんだけど・・・

「姫路さん」

「は、はい」

「その手紙、良い返事が貰えると良いね」

「……………はいっ！」

命短し、恋せよ乙女ってね。

おまけ 自宅にての会話

「そう言えば明久」

「？何、幽香」

「蹴ったとこ大丈夫かしら？」

「うんあの程度なら大丈夫だよ」

「そう……………」

あ、そういえば…………

「そういえば……………」

「？どうしたの？」

「いや……………なんかおぼろげなんだけど……………蹴られるとき「白い
ものが見えた気が……………」」

「……………忘れなさい」

「え？」

「忘れなさいって言うてるの!!!////////」

「わ、わかったけどなんで・・・」

「だ、黙りなさい!!!」

なんか今日は怒られてばっかだな・・・

第13話 日常？（後書き）

ちよつとラブレターの口をずらしました、理由？何となくです。
わ、忘れてたわけじゃないんですよ！？

第14話 Bクラス戦1（前書き）

やっぱり平日は忙しいから書く時間が少ないな・・・

まあ休日でも忙しい時もあるけど。

前話の色ですが、友人の完璧な趣味です

オリジナル技ですが、技名とどんな感じの技か、については友人と頑張って考えました。

気味だ。まあ、それが普通だよな。

「先陣は・・・」

「僕と幽香と妹紅とで行くよ」

「じゃあそれで頼む」

「了解」

「前は出来なかったけど楽しみね」

幽香・・・なんていうかごめんね・・・

『キーンコーンカーンコーン』

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『『『サー、イエッサー！！！！』』』』

昼休み終了のベルと同時に、ダツシュで教室を飛び出してBクラスへ向かって全力疾走。敵を教室に押し込む事が目的なので、とにかく勢いが重要となる

「ま………待って…、下さ〜い…」

だからいきなり指揮官が出遅れてるけどもいちいち構っていられない。

さつき雄二も言ってたけど、渡り廊下の戦闘は絶対に落とせないから、戦力も五十人中四十人を注ぎ込んで勝ちに行く。その代わり教室がほぼスツカラカンになっちゃうけど。

今回のこちらの主武器は数学。Bクラスは比較的文系が多いのと、担当教師の長谷川先生は広範囲の召喚フィールドを展開出来るという理由だ。他にも、英語Wの山田先生と物理の木村先生もいる。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

数は大体十人程度。あくまで様子見って所かな？

「いくよー!!」

「「「「「おあ!!!!!!」」」」」

Bクラス戦が開始された。

総合

Bクラス モブA 1947点

VS

Fクラス モブA 723点

数学

Bクラス モブB 137点

VS

Fクラス モブB 68点

物理

Bクラス モブC 140点

VS

Fクラス モブC 71点

圧倒的だ・・・「」」」」」ていうか、あつかいひどくないか!!
!???」「」」」」

なんか叫んでるけど無視して早くフォローしなきゃばい!!

「幽香!!妹紅!!・・・いくよ!!」

「ええ、わかつたわ」

「わかつた!!」

「」」」」」サモン!!」」」」

前回僕と妹紅の召喚獣は説明下から省くとして、幽香の召喚獣は・・・
・うん私服（原作以下略）に傘を持ってる。あとなんていうか、トラ耳と尻尾って・・・

気にしないでおこう・・・相手は、っと

英語W

Fクラス 風見幽香 345点

VS

Bクラス モブD 121点

数学

Fクラス 藤原妹紅 198点

VS

Bクラス モブB 119点

妹紅は得意科目じゃないけど点数が勝ってるから問題はないかな・
・えつと僕は、つと

物理

Fクラス 吉井明久 71点

VS

Bクラス モブN 188点

ローマ字が飛んだだと・・・

まあ冗談はほどほどにして、

「「おい待て！？なんだよあの点数！！？？」」

「なんかホント驚いてばっかだな」

「まあ、いいじゃない」

「おい二人とも僕の心配はしないんだね・・・」

「「当り前でしょ（だろ）」」

ですよね〜まあ・・・

「勝てないこともないけどね」

「な、雑魚のくせに！！」

あれは・・・ハルバートかな？それで相手が斬りかかってくるけど

「ほいっつと」

『ガッ、ドカッ』

「な……」

先端付近を地面に抑え込めばなれない操作じゃ動かせないからね。

「ほら、隙だらけだよ」

『ズバツ!!!』

モブN 109点

やっぱり一撃じゃ無理か……なら召喚獣でもできるか練習として

「……散れ」

閃鞘 散華時雨

まるで雨のごとく高速で刺突を行う……この技の利点は密度を調整して、小範囲か広範囲かわけるとこである

モブN 0点 戦死

「な……負けた？」

「嘘だろ!? あんな明らかに雑魚っぽい吉井の召喚獣にやられるなんて!？」

「気を引き締めろ! 奴らをただの雑魚だと侮るな! Dクラスに勝つたのはマグレじゃないかもしれぬ!」

うん・・・あんまり上手く出来なかったな・・・要練習だ

「お、やっぱり勝ってるな」

「うん、妹紅も勝ったみたいだね」

「当り前だ」

「明久・・・さっきの技・・・」

「ん？ああ、やれるかやってみただけど要練習だね」

「あれでか・・・」

だって違和感があるんだもん

「す、すみません・・・遅くなりました・・・」

あ、やっと追い付いたみたいだね。つて

「姫路さん、大丈夫？」

「何なら少し休んどく？」

「だ、大丈夫、夫、です。行って、来ます」

まあ、見た感じ大丈夫かな？

「き、来たぞ！姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かの叫びに、他のメンバーの目付きが変わった。明らかに姫路さんを警戒しているね

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です（な、名前出してもらえた・・・）。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」
「律子、私も手伝う！」

「『試獣召喚!』」

Bクラスも必死みたいだね……でも……

数学

Fクラス 姫路瑞希 412点

VS

Bクラス 岩下律子 187点

Bクラス 菊入真由美 152点

うわ……姫路さん400オーバーだ。ってことは……

「あ、腕輪だ」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

一科目400点以上点数を取ると、特殊能力を持った腕輪が使える様になる。その腕輪が姫路さんの召喚獣の左手首に装備されている

「そ、それって!?!」

「私達で勝てる訳無いじゃない!」

向こうの二人が姫路さんの腕輪を見て顔色を変える。

別に腕輪を持つてるからと言って絶対に勝てないとは限らないと思うんだけどな……

戦い方次第じゃ圧倒的実力差も覆す事だって難しくない。『戦闘』において一番大事なのは『戦術』じゃなくて『戦略』、要するにどう戦うかだし

「じゃ、行きますね」

姫路さんが手を握り込むと、その動きに合わせて姫路さんの召喚獣が標的の方へ左腕を向ける。

これって……

「ちよつ、ちよつと待つてよ!？」

「律子!とにかく避けないと!」

大袈裟な位に慌てて横っ飛びする二体の敵召喚獣。しかし

『キユボツ』

「きゃああああ」

岩下律子 0点 戦死

菊入真由美 0点 戦死

うわ……レーザーって……しかも2体とも黒墨だし、しかも一撃だよ……

「い、岩下と菊入が戦死したぞ!」

「なつ、そんな馬鹿な!？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ!」

Bクラスに動揺が走る。

でもあれは仕方ない……てか姫路さんの召喚獣の能力怖すぎ……避けられるかな?

「み、皆さん、頑張つて下さいー」

「や、姫路さん？その指示は指揮官としてはどーかと…」
「うおっしやあぁーっ！」
「やったるでえーっ！」
「姫路さん愛してるうっうっう」

馬鹿ばっかだ

「さて、僕達も行くっか」
「そうね」

「あ、姫路さんは休んでいいよ。疲れてるだろうし、腕輪で結構消費してるでしょ？」
「あ、はい」

戦場の流れもこっちに傾いたし大丈夫だろう

「あれ？妹紅は？」
「妹紅なら教室に戻ったわよ」

え？

「なんで？」
「……Bクラスの代表根本らしいわよ」
「……ああ、あいつか……」

根本恭二、一言で言えば『卑怯者』。
噂では『カンニングの常連』だとか、『球技大会で相手に一服盛った』とか、『喧嘩に刃物は当然装備』^{デフォルト}そして幽香たちにもかなり迷惑をかけた男子だ。

「なるほど。たしかにあいつなら何かしそっだね」

「私達も一応戻ってみる？」

「うん」

ホント、なにもなければいいんだけど・・・

第14話 Bクラス戦1（後書き）

今すごく悩んでいる・・・
根本のとどめ誰で刺そう・・・

番外 キャラ紹介 東方編（前書き）

今のところ出たキャラについて書きます。書き足し予定あります。
友人と一緒に考えながら書いてたらカオスに（笑）

番外 キャラ紹介 東方編

藤原 妹紅

読み ふじわら もこう

能力：死なない程度の能力

スタイル：身長は160位 男子制服でわかりにくい、貧んくらしいあるわ！！！！／／／／」（作者はログアウトしました

外見：白い長髪に赤い目、基本シャツにもつぺを穿いている。

学生服はスカートが慣れないとのことで男子の制服（生徒手帳には一応女子の制服で写っている）

召喚獣の能力：????????????

点数：古典、歴史に関しては400点を超えることも。

しかし地理は苦手で50台常連。ほかの教科は100〜200台である

口調：基本男口調だが時折女口調になる

設定：幻想郷で明久が初めて会った住人。どうも明久を放置できなくて関わっていくうちに「明久がいる」妹紅もいる」と言われるほど身近な人間になった。

料理の腕前は普通で、ちよくちよく明久の家に泊まりにいつている。明久のことは大切な友人であり大好きな人であり、過去のことが原因でとりあえず彼を傷つけるものに対しては容赦がない。

風見 幽香

読み かざみ ゆうか

能力：花を操る程度の能力

スタイル：身長は165位 トップ89のD「・・・ちよつと話があるんだけどいいかしら・・・」

外見：緑色の髪を肩にかからない程度に伸ばし、紅い目。よく傘を

持ち歩いている

召喚獣の能力：投影

50点の消費でもう一体召喚獣を作ることができる。しかしその召喚獣は1つの行動しかできず、その行動を終えると自動的に消える
点数：全科目300点越えというオールマイティ。強いて言うなら歴史と古典がたまに400点を行く

口調：基本丁寧語時折命令系

設定：実は幻想郷で最初の明久の被害者（向日葵の記憶参照）。
花の妖怪だけあって花が大好きで傷つけるものには容赦がない。

明久のことはよくからかったりするが、攻められると弱みみたいで、時折暴力をしまい落ち込んでしまったりしている。

明久のことは自分のものと言ったりしているが「明久の相手は明久本人が決めること」と思っている。

上白沢 慧音

読み かみしらさわ けいね

能力：歴史を食べる（隠す）程度の能力：人間時 歴史を創る程度の能力：ハクタク時

スタイル：身長は165位（帽子を入れて175行かないくらい）

・・・大きいです「だまれ！！／／／／」

外見：銀髪の長髪に黒っぽい瞳（人間時）と薄い緑の長髪に赤い瞳と・・・角（ハクタク時）。尻尾もあるらしい

教科担当：歴史

口調：学校では敬語、基本は中性的な話し方

設定：幻想郷の寺子屋の教師だが監視を理由に文月学園の教師をしている。

ワーハクタクだけに運動能力は高い。

お仕置きは基本拳骨、明久達には拳骨では効きにくいので頭突き。

明久のことは出会ったころは姉として面倒を見ていた。

自分が半妖であること知られることを恐れていたがバレてしまっ。しかし態度を変えずいつもどおり接する彼に思いをぶつけるも明久に「そんなことは関係ない、僕は好きで慧音といるだけだよ」と言われて以来、自分が半妖であることを引け目にとらなくなった。この頃の不安は何かしらと暴走するFクラスである。

八意 永琳

読み やごころ えいりん

能力：あらゆる薬を作る程度の能力

スタイル：身長165位 すごく・・・大きいです「あらあら」

外見：銀髪の長髪を三つあみにしており鈍い銀色の瞳。赤と青の半々の不思議な服を着ている（学校ではその上に白衣）

教科担当：保健医 保健体育（実際は全科目担当可）

口調：学校では敬語 基本は丁寧語

設定：温和で優しい性格をしているが、怒ると怖い・・・。

幻想郷で医者をしながらも明久のために（本人は問題ないと言うがよく怪我をするため）文月学園の保健医をしている。

天才であり点数はほぼつけようがなく、制限をしている（それでも勝てる人はほばいない）。

明久については自分達を「ネタばれのため後に表記」ことができる存在という意味で興味を持っていたが自分の過去、罪について聞いても態度を変えない人間性に女性として興味を示した（本人いわく）。

その外見、スタイルからファンクラブ等も多いが「明久君以外にはあんまり興味はないの」と断っているそうだ。

番外 キャラ紹介 東方編（後書き）

・・・これはひどい・・・

幽香に関してですが・・・歌のネタです!!

第15話 Bクラス戦2 『アキ』（前書き）

友人と明久の能力やお話について話してたら・・・結果

影月・友人「うわ・・・中二病くせえ・・・」

気を取り直してどうぞ

第15話 Bクラス戦2 『アキ』

教室にたどり着くと

「お前達、覚悟はできているな」

「……補修はいやだああああ」「……」

Bクラスの生徒だろうか……鉄人に連れて行かれた

「お、明久」

「妹紅、これは……」

そこには壊されたちゃぶ台、ペン漁られたカバンが散らばっていた。
……あ、僕達のところはまだ何もされてなかったみたいだね

「ごめん……私が来た頃にはあいつらがいて……それに一人逃げられちゃった」

「大丈夫よ、被害をここまで抑えられただけよかったと思いましょ」

「うん、一応何か取られたりしていないか確認しよう?」

「……うん(そうね)」「……」

うん何も取られてないな。あれはずっと身に着けてるしね。

僕は首にかかっているひし形の結晶思い浮かべた

「どうした?何かあったのか?」

「……って雄二どこ行ってたの、危うくもの全部壊されるところだったじ

「やないか・・・」

「これは・・・」

「Bクラスだよ」

どこに行つてたのかわからないけど雄二達と秀吉が帰ってきたので簡単に状況を説明した

「被害は少ないが確実に補給テストに響くのう」

「まあそれはそうと、何でゴリラは教室から離れたりした訳？」

「その呼び方はやめる。いや、向こうから協定を結びたいという申し出があつてな。その調停の為に教室を出ていた」

「協定？」

「ああ。『四時迄に決着が着かなかつたら戦況はそのままにして、続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する』つてな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「何で？体力勝負に持ち込んだ方がこつちとしては有利なんじゃ」

「

「姫路以外は、な」

「「「あつ」「」」

「奴等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日という事になる。その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる」

「なるほど、だから受けたのかしら？姫路さんが万全の態勢で勝負出来る様に」

「そういう事だ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

「うーん・・・」

なんか引つかかるな・・・

「どうした明久？バカのくせに悩んだりなんかして」
「雄二バカは余計だよ。いや、なんかこう引つかかるものがあって
さ……」

すると

「確かにそうね……こんなことをするようなああの小物がこんな対
等な条件の協定をただで出すとは思えないわね」
「とするとなんで……」

「吉井、ここにいたか!!」

いきなりの来訪者の声が教室に響いた

「どうしたの？横田君」

「実は島田が人質に捕られた」

「……はあ!!??」「……」

器物破壊の次は人質!?!?てか島田さんなんで指揮官頼んできたのに
人質になってるのさ!!!

「お陰で相手は残り二人なのに攻めあぐねている。どうする?」
「わかった、とりあえず状況確認に行こう」

なんにしても急がなきゃ……

Bクラス前付近の廊下

そこには島田さんの召喚獣を人質に取る2人のBクラスの生徒がいた。

「そ、そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

敵さんの一人が僕達を牽制してくる。成る程、ただ戦死させるんじゃないくて、人質を取って補習室送りをチラつかせてこっちの士気を挫く作戦か。上手いやり方だ。

科目は・・・歴史か・・・なら

(幽香・・・)

(・・・わかったわ)

「ど、どうする？これじゃ手が・・・」

「総員突撃用意！」

「・・・え！！！！？？？？」

「ちよ、それでいいのかよ？あっちには島田さんがいるんだぞ！？」

「戦場では犠牲はつきものだよ。1人のためにみんなを危険に合わせるわけにはいかないからね」

「確かに明久の言うとおりだな」

「ええっ！！ちよっど！？」

あともうちよっどかな？

「ちよ、ちよっど待てお前達！！！」

「ほらあ、あっちからもちよっど待ったコールが掛かってるじゃない

いか。もう少し考えてからでも遅くは…」

「コイツがどうして俺達に捕まったと思ってる？」

「バカだから？」

「バカだからでしょ？」

「バカだからじゃないの？」

「殺すわよ」

「明久に何かしようものなら逆にやるわよ？（ニコッ）」

「幽香押さえて！！じゃあ、なんで捕まったの？」

まあ聞いてみるか

「コイツ、『吉井が怪我した』って偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

「えっ！？島田さん……」

「な、なによ／＼」

「怪我した僕に止めを刺しに行こうとするなんて、あんたは鬼かあ！！」

「違うわよ！！ウチがあんたの様子を見に行っちゃ悪いっての！？
これでも心配したんだからね！！」

「……島田さん、それマジ？」

「そ、そうよ。悪い？」

「へっ、やっと解ったか。それじゃ、大人しく……」

「『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから」

「……総員突撃！！」

ちよ妹紅、幽香！？

「何で！？」

「そんなあからさまな嘘に騙されて部隊に迷惑掛ける様な奴は要ら

ん！！居ても足手纏いだ！！」

「お、おい待ってって！見捨てるのか！？そんなあっさり味方を見捨てるのか！？」

「黙りなさい！！さあ、そいつにはもう人質としての価値は無いわ！大人しく往生しなさい！！」

「くっ、畜生っ！だったら望み通り、コイツを道連れにしてやるよお！！」

！今だ！！

「幽香！！」

「・・・了解したわ」

いや・・・しびしびと言わないでね・・・

Bクラスの二人と島田さんの間に2人の幽香の召喚獣が現れる

「「え？」」

歴史

Bクラス 鈴木二郎 33点

Bクラス 吉田卓夫 19点

VS

Fクラス 風見幽香 412 - 50点 x 2

「ダブルスパーク」

2本の砲撃が一瞬にして相手の召喚獣を消し飛ばした

幽香の召喚獣の能力・・・それは『投影』

50点の消費でもう一体召喚獣を作れる。しかしその召喚獣は1つの行動しかできず、その行動を終えると自動的に消える。

「戦死者は補習ううう!!!」

「ぎゃあああ!!!」

「助けてえー!!!」

打ち取った瞬間、鉄先生に担ぎ上げられて連行されるBクラスの2人。

ふと思ったんだけど、鉄先生はどーやって戦死者の存在を察知してるんだろ？身体のとっかに『戦死者察知センサー』でも着けてるんだろーか？

それより……

「島田さん……」

「吉井!!!よくも見捨てようと……」

「……ちよつと歯を食いしばりなさい」

「え？」

『パアン!!!』

「!?!」

いきなり幽香にひっぱたかれたことよって島田さんは目を白黒させる

「貴方ね、敵の偽情報に踊らされたばかりか、指揮官が持ち場を離れるとはどういうことかしら？明久はあなたを信じて指揮を任せて行ったのに、危うく部隊が全滅するところだったのよ？」

「だ、だって吉井が・・・」

「そんな物理理由にならないわ。貴方のその身勝手な行動が、部隊全体を危険に巻き込んだのよ？分かってているの!？」

「あ・・・う・・・」

「さつき言った台詞、アレは芝居でも何でもないわ。自分本位な事しか考えない様な奴は、居たって邪魔になるだけだわ・・・足手纏いなよ!！」

「幽香!！」

「・・・ちよつと頭に血が上ってたわね・・・ごめんなさい」

そう言つて幽香はみんなを連れて教室に戻っていく・・・ハア・・・

「島田さん・・・」

「・・・」

「あゝ、ごめんね島田さん。幽香って興奮し過ぎると口調が乱暴になつちやうから・・・」

「・・・」

「でもさ・・・、幽香の事、あんまり悪く思わないであげて。あれでも島田さんの事、かなり心配してたみたいだからさ・・・。だから」

「分かってる」

「え?」

「風見さんが言つてた事、間違つてない。ウチは取り返しのつかない事を仕出かす所だつたんだ。叩かれて当たり前よ」

「島田さん・・・」

「・・・」

うう・・・空気が・・・よし

「だ、大丈夫だよ!失敗は誰にだってあるんだからさ!また次の機

会にこの汚名を挽回すれば良いじゃないか！」

「吉井、汚名は『挽回』じゃなくて『返上』だったと思うけど？」

「あれ？そーだったけ？」

「全く…、何でウチでも知ってる様な熟語を日本育ちのあんたが知らない訳？」

「ぐっ……」

「……ふふっ」

「ほ、ほら島田さん掴まって！僕達も早く教室に戻ろうよ！」

「あ、誤魔化した」

「気のせいです」

ふう、なんとかなった……

「吉井……」

「ん？何？」

「ごめん」

「良いよ、別に。島田さんが無事で良かった」

「あと……ありがとう……」

「うん……」

やっぱりお礼いわれるってちょっと恥ずかしいな

「ねえ、吉井」

「な、何？」

「今度からさ『アキ』って呼んでも良い？」

「え？」

「ダメ？」

「いや、ダメでは無いけど……」

「その代わりにさ、ウチの事も『美波様』って呼んでも良いから」

「僕だけ様付け！？」

「ふふっ、冗談よ、冗談。」

「島田さんの場合、冗談には聞こえないんだけど・・・」

「じゃなくて？」

「・・・美波」

「うむ、よろしい」

なんか嬉しそうな雰囲気だな・・・

「ほら、皆きつと待ってるよ？早く行こ、アキ」

「おわっ！？ちよっ、島・・・美波、そんな引っ張らないで！」

ま、元気になってくれたし、良っか。

第15話 Bクラス戦2 『アキ』(後書き)

いつもこれなら・・・
いや言っまい

第16話Bクラス戦3 小物の畏(前書き)

よし、ある程度どうするかは決まった!!後はそれを書けるかだ!!
無理だ・・・

明「あきらめるのはや!!??」

第16話 Bクラス戦3 小物の罠

さて協定どつりBクラス戦は明日まで持ち越しになつたけど・・・

「Cクラスが試召戦争の用意を始めているだと？相手はAクラスか・・・いやそれはないだろうから。
漁夫の利を狙うつもりか・・・いやらしい連中め」

ムツツリーニの情報いわくCクラスが怪しい動きをしているらしい
Cクラス・・・あれ？なんか大切なことを見落としてる気が・・・

「で、どうするんだ？」

「協定を結ぶか。ま、Dクラスを攻め込ませるぞつて脅しをかければいいだろう」

「わかつたわ」

Cクラスと協定を結ぶということになり、雄二、僕、幽香、妹紅、ムツツリーニで行くことになった。

姫路さんと秀吉は教室で待機してもらっている

少年少女移動中

Cクラス

「失礼するぞ。すまないがCクラス代表はいるか？」

「私だけど、何かようかしら？」

僕たちの前に出てきたのはCクラスの代表の小山さんだった

あれ？人の気配が……！！！！

「Fクラス代表としてCクラス「ちょっと待って雄二」ん？どうした」

「えつと小山さん」

「何かしら？」

「あそこに誰を隠してるんですか？」

「！？な、何を言ってるのかしら？」

そうだ……Cクラスといえば……

「言い方が悪かったかな？根本君そんなところに隠れてないで出てきたらどう？」

「なっ！！！」

根本君と小山さんは……付き合ってるんだ

side 雄二

な……何言ってるんだこのバカ？根本がここに……

「っちばれたか、おい坂本を逃がすな！！やれ！！！」

なっ！？マジでいただと！？

「っち！妹紅、ムツツリーニ！雄二を連れて逃げて！！！！」

「………了解」

「わかった。明久気をつけるよ」

「大丈夫だよ。幽香足止めするけど手伝ってくれる？」
「聞かなくてもわかるでしょ？」

藤原と風見も入った時から戦闘態勢だったが・・・

「ほら、代表行くぞ。お前が戦死したら困るんだ」

「あ、ああ・・・」

明久お前・・・なんなんだ？

side 明久

さてと、雄二も逃げたことだし

「根本君、約束を破るなんてひどいじゃないか」

「うるせえ！！お前ら！！こんな雑魚早くつぶせ！！！！」

「・・・」

「ゆ、幽香？」

「・・・大丈夫よ。さ、行きましょう明久」

「だね」

「「サモン！！」」

数学

Fクラス 吉井明久 68点

Fクラス 風見幽香 312点

VS

Bクラス モブ×10 平均172点

「「「「な、なんだよあの点数」」」」

「こいつら驚くしか脳ないのかしら・・・」

「あははは・・・」

「怯むな!!数でつぶせ!!」

「「「「「おお!!!!!!」」」」」

あら?根本君がない・・・うわ・・・逃げてるよ・・・

「明久、少し時間作ってくれないかしら?一気に吹き飛ばすから」

「了解、じゃあ行くよ!!」

「な、吉井が一人で突っ込んできたぞ?」

「は、あんな雑魚すぐつぶしてもう一人を一気につぶすぞ!!」

はあ、ひどい言われようだな、ホント

「・・・散華時雨」

閃鞘 散華時雨、刺突の密度を調整することで範囲を調整することができる。

だから・・・

「な、近づけねえ」

「近づこうにも攻撃で押される!?!」

広範囲は威力が減るものの、足止めにはちょうどいい!!

「明久!!準備OKよ!!」

「わかった」

「あ、攻撃がやんだ?」

「・・・消し飛びなさい・・・」

「「「「「え?」」」」」

マスタースパーク

Bクラス モブ×10 0点 戦死

「「「「「え?」「」「」」」」」

幽香の召喚獣は基本傘とかによる攻撃だが、力をためることによって砲撃とかを撃つことができる。

これは召喚獣自身の能力で腕輪とかを取る必要はないようだ。

「さ、逃げるよ」

「そうね」

少女少女逃避中

Fクラス

「ただいま」

「ただいま」

「お、大丈夫だったみたいだなお疲れさん」

妹紅が労いをくれる

「しかし、どうするのじゃ?」

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦が無い以上連戦という形になるが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

ま、それが狙いだらうね

「まあ、向こうがその気ならこっちにも考えがある」
「考え？」

「ああ、明日実行する。とりあえず今日はこれで解散だ」

・・・

保健室

「失礼します、八意先生いますか？」

「あら、明久君どうしたの？あと誰もいないしいつもの呼び方でいいわよ？」

「じゃあ、永琳。じつは・・・」

キングクリムゾン！！

次の日の朝

「考えがあるって言ってたけどどうするの？」

幽香がそう質問すると雄二は

「ああ、コイツを秀吉に着てもらおう」

「んむ？それは別に構わんが、ワシが女装してどーするんじゃ？」

いや、構おうよ、男としてみてもほしいなら構おうよ秀吉！！

「なに、秀吉には木下優子としてAクラスの使者を装ってもらおう」

木下優子。秀吉君の双子のお姉さんであり、Aクラス所属。違いと
いったらテストの点数と喋り方位しか見当たらない程秀吉君にそっ
くり。しゃべり方なら秀吉はすぐにまねれるからほぼ見分けようが
ない。

成る程ね、そのお姉さんに化けてAクラスとして圧力を掛けようっ
て事か。

「という訳で秀吉、早速用意してくれ」

「う、うむ…」

坂本君から制服を受け取って、その場で生着替えを始める秀吉

「……………」

おい、君達秀吉は男だ、あとムツツリーニ写真を取らない。

姫路さんに美波、まるで女の子を見るようにシヨックを受けない
って、眼つぶしは危ないって!!

「よし、着替え終わったぞい」

「じゃあCクラスに行くぞ」

「一応付いて行くよ」

またあんなことがあったら困るしね

少年少女移動中

Cクラス前

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

「気が進まんのう……」

「そこを何とか頼む」

「むう……。仕方無いのう……」

「悪いな。とにかくあいつ達を挑発してAクラスに敵意を抱く様仕向けてくれ。お前なら出来るハズだ」

「はぁ……。あまり期待はせんでおくれよ……」

そう言つて秀吉はCクラスへ向かった……。大丈夫かな？

『ガラッ』

『静かにしなさい、この薄汚い豚共ッ！』

……………マジか？

「……………流石だな、秀吉」

「うん。これ以上無い挑発だね……」

「もう既にAクラスに敵意が向いてるんじゃない？」

てゆーか、秀吉のお姉さんってあんな感じなの？

『なっ！？何よアンタ！』

『話し掛けないで！豚臭いわ！』

うわ、理不尽だ……

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数が良いからいい気になってるんじゃないわよ！何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で十分だわ！』

『なっ！？言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですってえっ！！』

いや、誰もFクラスなんて言っていないから

『手が汚れてしまうから本当は嫌なんだけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。丁度試召戦争の準備もしているみたいだし、覚悟しておきなさい。近い内に私達が薄汚い貴女達豚共を始末してあげるから！アハハハハハ　！』

「ねえ、明久演劇部って・・・」

「妹紅言わないで・・・僕もすごい悩んでるから・・・」

「これで良かったかのう？」

うわー、凄いスッキリした顔してるー。何かお姉さんに対して不満でも溜まっていたのかなあ・・・。

「ああ。とても素晴らしい仕事だったぜ。ホレ」

『キイイイイ！！ムカつく！！！何よ調子に乗ってえ！！！！Fクラスなんか相手にしてられないわ！！Aクラス戦の準備を始めるわよ！！！！』

「くくくわっ・・・」

・・・気を取り直してBクラス戦に向けて用意するかな
時間はけし飛ぶ!!

「ドアと壁を上手く使え！戦線を拡大させんじゃねーぞ！」

坂本君の怒号にも似た指示が飛ぶ。

「勝負は極力単教科で挑め！補給も念入りにしろよ！」

雄二の指揮の下、ここ数時間はほぼ順調かのように見えた・・・
しかし

「姫路頼んだ!!」

「はい、さも・・・!!?」

さつきから姫路さんがおかしい・・・なにが・・・
あれは・・・根本君・・・!!!

その手に持っていたのは・・・手紙・・・
そう姫路さんの・・・

「・・・姫路さんきついなら下がっていいよ？」

「え?でも・・・」

「大丈夫だから、じゃあちよっと雄二のところに行ってくるね」

はぁ・・・ふっ・・・面白いことしてれるじゃないか

根本
・
・
・

第16話Bクラス戦3 小物の畏（後書き）

さあ、次回

お前の敗因は俺を怒らせたことだ

ジヨジヨネタですねわかります

第17話 Bクラス戦ラスト 君の敗因はただ一つ・・・（前書き）

さて友人から頼まれたが・・・うまく書けるかな？

先生の名前変更

第17話 Bクラス戦ラスト 君の敗因はただ一つ・・・

「・・・雄二・・・」

「明久？なんだ逃げてきたのか？」

「ちよつと話がある」

「・・・なんだ？」

真剣な話と読み取ったのだろう・・・雄二がまじめな雰囲気になる

「姫路さんを戦線から外してほしい」

「なんでだ？」

「それは言えない」

「なにか、策でもあんのか？」

「Dクラスの手を借りる位かな？あと根本君の服がほしい」

「明久お前・・・」

？あつ・・・

「いや、前回教室荒らされたでしょ？その仕返しにだよ」

「・・・人数はさけないぞ？」

「幽香と妹紅、あとムツツリー二がいれば」

「わかった。だが絶対成功させるよ」

「当り前でしょ」

さてじゃあ用意するかな・・・

Dクラス

「ごめん待たせた？」

「いえ？待ってないわよ」

「大丈夫だよ」

「そっか」

さてあとは・・・

『プジュプジュ』

「はい」

『・・・準備OK』

「ごめんなさい吉井君、お待たせしました」
「大丈夫ですよ」

さて永琳もきたしやるか！！

「じゃあ先生お願いします！！」

「はい、試験召喚獣召喚を承認します」

「！！サモン！！」

僕は召喚獣を召喚し・・・

『ドカツ！！』

壁を殴りつけた・・・

side 雄二

「お前らいい加減あきらめろよな。教室の出入り口に群がりやがって暑苦しい事この上ないっての」

「どうした？軟弱なBクラス代表はそろそろギブアップか？」

「はぁ？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

『ドンドン!!』

始まったみたいだな・・・

「そうか？頼みの綱の姫路も調子が悪そうだぜ？」

「お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」

「けっ！口だけは達者だな負け組み代表様よお」

「負け組？それがFクラスのことならもうすぐお前が負け組代表だな」

『ドンドン!!』

「・・・さつきからドンドンとうるせえな。それにこの暑さはなんだ。エアコンきいてんのか？おいッ窓全部開けとけよ！」

「・・・態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

「なんだよ！散々ふかしておきながら逃げるのか！全員で一気に畳み掛ける！！誰一人生きて帰すな！！」

頼むぞ、明久！！

side 明久

つく・・・さつきから殴ってるけど間に合わない・・・

「明久・・・手が・・・」

さすがにフィードバックで手がボロボロだな・・・

？てか直接やったほうが壊せるんじゃない・・・

「三人ともちよつと距離置いてね」

「「「え？」「」」

ふう・・・やることは簡単だ・・・視ればいいんだ・・・

side 妹紅

なんか黙っちゃったけど・・・！？まさか

次の瞬間周りが・・・殺気に、いや、でも優しい雰囲気にもまれた・・・

これは・・・

明久を見るとその瞳は青く、いや深い蒼に輝いていた・・・

side 明久

「・・・視えた」

あとは力を調整しないと壊しすぎちゃうからな・・・

「ふう・・・蹴り穿つ！！」

閃走 一鹿

真横にきれいなまでな一直線の蹴りを壁に・・・点に叩き込む！！

『やれ！！明久』

『ドガツ！！！！』

『ガラガラガラ・・・』

僕の蹴りは点を貫き・・・壁に人が通れる大きさの大穴を開けた・・・

「な、壁を壊すなんて、どついう神経してるんだあの野郎！！」

「藤原妹紅と」

「風見幽香、Bクラス・・・」

「・・・やらせるかああああ！！！！」

Bクラスの人達が二人の前に立ちふさがった。さすがにこの人数はきついかも・・・

「は、結構驚いたが・・・残念だったな」

『スタツ！！！！』

まだまだ！！

ここで少し教科の特性について説明しよう

各教科の先生によってテストの結果に特徴が現れるんだが・・・
例えば、数学の木内先生や物理の森田先生、日本史の五十嵐先生は

採点が早い。

世界史の田中先生や生物の不知火先生は点数のつけ方が甘く、数学の長谷川先生や英語のリアン先生は召喚範囲が広い。

また、英語の遠藤先生や歴史の上白沢先生は多少の事は寛容で見逃してくれる。

あと、基本承認に関しては西村先生と高橋先生以外は担当科目の承認しかできない

話を戻すが、じゃあ保健体育の先生はというと、採点が早いわけでも甘いわけでもなく召喚可能範囲が広いというわけでもない。

保健体育の特性、それは教科担当が体育教師であるが為の『並外れた行動力』である
すると、屋上よりロープを使って2人の人影が飛び込み、根本の前に降り立った

「………Fクラス、土屋康太」

現れたのは同じFクラスのムツリーニと保健体育の鈴村先生だ

これで……

「Bクラス近衛部隊が受けますッ!!」

「残念だったな、あとはその雑魚だけ、お前達の負けだ!!」
「つく」

雄二が悔しそうに呻いてるけど・・・

「いや、これでいいんだよ・・・」

「なに？」

そう言えば、さっきの説明だけ・・・実は言うとなんか例外な人がいる。それは・・・

「八意先生、Fクラス吉井明久、Bクラス根本恭二に現代文で勝負を挑みます」

「な、お前バカか？保健医がそんなこと許可できるわけ・・・」

「承認します」

「え？」

それは保健医八意永琳は全科目の試験召喚獣の召喚を承認することができるとのこと・・・

「サモン！！」

現代文

Fクラス 吉井明久 112点

VS

Bクラス 根本恭二 235点

「ふん、確かにちょっとは高いようだがその点数で勝とうなんて・・・行くぞ・・・」なっ！！

根本君の・・・コイツの御託なんかどうでもいい・・・

「一瞬で終わらせる・・・」

「あ……明久切れてるね……」

「ええ、切れてるわね……なんか帰りたくなつたわ……」

あつちで妹紅と幽香がなんか言ってるし、永琳が冷や汗を流しながらひきつった笑顔をしているけど無視だ！！

「ここに貴様の居場所などない……消え去るがいい……」

閃鞘 凶刺死獄

一瞬で接近した僕の召喚獣は根本の召喚獣の腕と足を切り払い、そしてとどめに心臓、喉、眉間、水月に一瞬で刺突をたたきこんだ・

Bクラス 根本恭二 0点 戦死

「え……?」

「……な、う、嘘だろ……」「」「」

「根本……」

「!?!ひ、ひっ!!!!」

「一つだけ言ってる。今回の君の敗因はただ一つ……」

「僕を……『俺』を怒らせた……ただそれだけだ……」

第17話 Bクラス戦ラスト 君の敗因はただ一つ・・・（後書き）

ふう・・・なんとか書けた・・・

第18話 Bクラス戦 戦後対談(前書き)

やっぱり女装は外せないよね!!

第18話 Bクラス戦 戦後対談

「いつつ……」

「ほら、もう少しで終わるから我慢しなさい」

うっ……永琳の口調がちよっと崩れてる……お、怒ってるのか？

「お主……思い切った行動に出たのう」

「あはは、それもそうだね」

僕は穴のあいた壁を眺める……あんまり大きな穴にはなっていないみたいだね、よかった

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。なあ、負け組代表？」

「……」

おとなしいな……どうしたんだろう？

「いや、明久の気を当てられたんだろう」

「ご愁傷さまね」

「？何を話しておるんじゃ？」

「木下君は気にしなくていいのよ」

そこまで強くした覚えはないんだけど（前回の最後のセリフの時に軽く気当てをやっています

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前達には素敵な卓袱台をプ

レゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言に、当然周りの皆がざわつき始める

「落ち着け、皆。前にも言ったが俺達の目標はAクラスだ。ここはあくまでゴールじゃなく、通過点にすぎない。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思っ」

「……条件はなんだ？」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

うわ……誰もフォローしないや……

「そこで、お前達Bクラスに特別チャンスだ。Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけで良いのか？」

「ああ、それだけで良い。ただし……」

そう言つて雄二は……

「そのままじゃ面白くねえから、Bクラス代表がコレを着てさっき言った通りに行動してくれたら見逃してやるう（笑）」

Cクラス対策で秀吉が着ていた女子の制服を取りだした。どこにしまつてたんだろう……

「さ、坂本・・・」

「ん？なんだ藤原？」

「えっと、その・・・」

「坂本、相手に女装させる趣味があつたなんて・・・驚いたわ（棒読み）」

「な！？風見、趣味じゃねえよ！！」

雄二が幽香にいじられるのは無視しとこう・・・それより永琳いつまで体触ってるんですか

「壁を壊すような力を使つたんですから、他のところに影響がなかったか調べてるのですよ」

心を読まないでください

「ばっ、バカな事を言うな！この俺がそんなふざけた事を！」

「「「Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！」「」」

「「「任せて！絶対にやらせるから！」「」」

「「「「それだけで教室を守るなら、やらない手は無いな！」」」」

「「「うをおおおー！！い！！？」」」

うん・・・すごい団結力だねBクラス・・・

「んじゃ、決定だな」

「くっ、よ、寄るな変たくほうっ！？」

「取り敢えず黙らせました。閣下」

「お、おう。ありがとう」

へ〜いいパンチだな・・・

「じゃ、着付けに移るとするか。明久、任せた」

「えっ、僕!!?何か嫌だな・・・」

「じゃあ藤原あたりに・・・」

「わかったやるよ・・・」

まあ、手紙のためだしね・・・

「う、うう・・・」

「あ、やば・・・」

「落ちなさい」

『ガクッ』

幽香：頸動脈を絞めるって・・・

まあ一年の頃何かしらと近づいてきてうざかった、って言ってたもんね

「これってどうつけるんだ？」

女子の制服なんて着け方わかんないな・・・

「私がやってあげようか？」

「そう？悪いね。それじゃ、せっかくだし可愛くしてあげてよ」

「あ、それは無理。土台が腐ってるから」

・・・やばい、否定できない・・・

さて目当てのモノは、っと

「・・・あつた」

「何があつたんだ？」

「うわっ!?!?・・・何だ妹紅か・・・脅かさないでよ」

「え?あ、ごめん。それよりその手紙何？」

僕の持っている手紙を見ても妹紅が聞いてくる。あ、そうか妹紅達知らないんだ

「姫路さんの手紙だよ」

「ふくん、渡しとこつうか？」

「そうだね、お願い」

さてと目当てのものは見つかった・・・

『ガラッ!!!』

「失礼します」

「え?上白沢先生どうしたんですか？」

慧音が来たことにみんな驚いてる・・・

あ、やばいかも・・・

「ちよっとね・・・あ、いた(ニ)コッ」

「!?!?」

慧音が笑顔でこっちに・・・逃げるなら・・・いや、もう遅いか・・・

『ゴシッ!!!』

「!!!!!!!!!!!!!!」

やパリ、この頭突きは痛い!!

「いくぞ、明久・・・」

「け、慧音・・・口調・・・」

「妹紅、黙つときなさい。巻き添え食らうわよ・・・」
「幽香・・・」

『ズルズルズル、ガラツ!!!』

あゝ痛みで口調が・・・それよりこの後説教か・・・

side 妹紅

「な、なんなんだあれ・・・?」

「いや、慧音がマジギレしてただけ」

「そ、そうか・・・」

うん、坂本あんまり突っ込まなくて正解だ

さてこの服は・・・ごみ箱に入れとくか・・・手紙、姫路さんに渡しに行くかな。

少女移動中

「よっ、姫路さん」

「!?!?ふ、藤原さんですかどうしたんですか?」

「ハイこれ」

「!?!?これは……」

「事情は何となく察してる。あ、大丈夫だよ？明久は何も言っていないし中も見えていないから」

「その……吉井君は……?」

「慧音に説教されてる、まあ今日のはやりすぎちゃったからね」

「そうですか……ほんと吉井君って優しすぎますよね」

「……そうだね」

私がどういふ存在かしても受け入れたり、10救うために自分をかえりみないほだけどな……

「その、藤原さん」

「?なに」

「藤原さんは吉井君のことが……好きなんですか?」

……

「好きよ。私だけじゃない幽香もね」

「そう、ですか……」

「でも……」

「?」

「幽香もそうだけど、私達は『明久の相手は明久自身が決めること』だと思ってるの」

「……強いですね……」

「強くないわよ……まあ、私にできることは選んでもらえるように頑張ることくらいだけだね」

全然気づいてくれないけどね

「……」

「さて……帰るか……あ、あと姫路さん」

「なんですか？」

「私のことは妹紅でいいよ」

「じゃあ、妹紅ちゃんって呼びますね」

「ちゃんって……まあ慣れるしかないか……じゃあね」

「はい」

さて幽香と合流して明久を迎えに行くかな

第18話 Bクラス戦 戦後対談（後書き）

おまけ

ただいま説教中

「壁を召喚獣といえ、素手で殴るとなんてどういことだ!!」

「いや・・・なんていうか、ね？」

「・・・お願いだ・・・」

「え？」

『ギョッ』

ふいに抱き締められて・・・これは・・・涙？

「お願いだ・・・私達をあんまり心配させないでくれ・・・」

「・・・うん・・・ごめんね慧音」

ホント僕って女の子の涙に弱い・・・

PV5万超え記念短編 殺人貴との会合（前書き）

題名の通り

紅魔館、紅い霧編後となっております

PV5万超え記念短編 殺人貴との会合

吉井明久こと僕はとても悩んでいた・・・

「なんか能力に目覚めたのはいいけど・・・名前もわからないし、鍛えようにもどうすればいいのかわからないし・・・」

能力の一つである。』 ツて場所に行ったことよって目覚めたこの能力

なんていうかスイッチ？みたいなものを切り替えると視界に点と線が見え、線を切るとどんなモノだろうと切ることができ、点をつくとあらゆるものを殺すことができるという能力・・・

僕はこれに目覚めてから結構立つけどどうすればいいのかわ答えが出すことができず、森を歩いていた・・・？森？

「あ・・・迷ったあああああ！！！」

どうしよう・・・？あれは・・・人！？まさか同じように迷った・・・！！！！

その人は妖怪に追いかけていた・・・

「くっ！！！」

何か出来るわけではないが・・・追いかけるなきゃ！！

少年追跡？中

しかし・・・そこで見たのは妖怪に襲われる人ではなく、妖怪と対等に戦い、ましてや倒している人だった・・・それ以上に

「・・・すごいな・・・」

その人はたった一本のナイフで妖怪を解体していく、乱雑にはなくあまりにもきれいな動きで・・・

いつの間にかその戦闘は終わっており、その人は僕を見ていた・・・

side???

はあ・・・空間を飛んでみればいきなり魔物？に襲われるしついてないな・・・
？

そこにはいつからいたのだろうか、中学生くらいの少年がいた・・・！？な・・・いやこれは・・・魔に対して感じるものじゃなくて・・・なんていうんだろうか・・・
まるで同類にあつたような・・・
まあいいか

「えつと君、ちょっといいかな？」

「え？あ、なんですか？」

「ここに永遠亭ってところがあるって聞いたんだけど・・・」

「ありますけど・・・それよりお兄さんその目・・・」

あ、いけない聖骸外したままだった。

「僕と似たような目ですね」

「・・・え？」

今この少年は何て言った？この『直死の魔眼』を『僕と似たような』？

「あ、いや気のせいね、君・・・線と点が見えるのかい？」え、はい」

「そうか・・・」

なるほど・・・さっきの感覚はそういうことか・・・でも、何だかおれとは違うような・・・

「すまないけどそれについて詳しく教えてくれないかな・・・？」

「え？あ、いいですけど・・・」

・・・？あつ・・・

「ああ、ごめん。自己紹介がまだだったね。俺は・・・」

「遠野志貴、ちょっとした物探しの旅人だよ」

side 明久

互いに自己紹介をした後、志貴さんがここに来た理由と僕がこの能力に目覚めた経緯を話した。

「まさか、先生が前言ってたところ？でも彼はそれよりも・・・」

「えっと・・・志貴さん？」

「ああ、ごめんそれについてだったね。」

それは『直死の魔眼』と言って物の死を点や線としてみる力なんだよ」

「物の死……」

「怖い……かい？」

なんていうんだろう……確かに怖いと言われるれば怖いけど……

「僕は約束したんです。たとえどんなことがあると前に進み続けるって……」

「……」

「それに……」

「それに？」

「これは間違いなく僕自身の力である意味自分自身です……それを否定するなんてバカみたいじゃないですか」

「……」

「?どうしたんですか？」

いきなり黙り込んだけどどうしたんだろう……

side 志貴

驚いた……自分自身だから否定するのはバカみたい……

「ぷっ」

「？」

「あはははは……!!!」

「な、なんで笑うんですか!!!」

「いやごめん、ふふそっか自分自身か……」

まさかこんな小さい子から教えられるなんて俺も歳かな・・・まあもう100はいつてそうだけど・・・

「あ、その・・・志貴さん頼みがあるんだけど・・・」

「？なんだい」

「僕に戦い方を教えてくれませんか？」

「・・・なぜだい？」

「僕は、守りたい人たちがいるんです・・・」

「・・・」

「それに僕は前に進み続けるって誓ったから・・・」

「力を手に入れるってことは他人を傷つけるかもしれないってことだよ？」

「・・・」

「それに逆に傷つけられる覚悟もいる。もしかしたらその守りたい人を守れないかもしれない」

俺は・・・守れなかったから・・・

「それに力を手に入れるということはそれだけ過酷だということ、場合によっては死ぬかもしれないんだよ？」

「ですね・・・でも・・・」

「僕は、何も努力しないで守れなくて後悔するよりも、何かを守るために血反吐を吐くような努力をするほうがましだ」

「それで守れたなら最高でっすけどね」

「・・・人によつては夢、理想って言うかもしれないな・・・

「大怪我するかもしれないよ？」

「今さらですし、覚悟の上です」

「最悪死ぬかもしれない」

「死ぬ覚悟でなんかしません、絶対生き残ってやります」
「・・・・・・・・」

はぁ・・・これはてこを使っても動かないだろうな・・・

「はぁ・・・負けだ」

「え？じゃあ・・・」

「いいよ、教えてやるよ。ただしあんまり期待するなよ？」

「はい!!」

でも、こんな子にあんな思いはさせたくないし、大人である俺から教えられることは教えようかね・・・

「まあ、話も決まったことだし明久」

「？なんですか？」

「永遠亭まで案内してね？」

「あつ・・・・・・・・」

本当に大丈夫かな・・・

side 明久

志貴さんに弟子入りしてから毎日訓練を行った・・・

それこそ本当に血反吐を吐くような毎日。妹紅達やお母さん達とも心配とかしてたけど、

僕はそれを説き伏せて毎日志貴さんのとこに通いつめた。

志貴さんいわく体力面や肉体能力に関しては基礎ができているから

後はどううまく体を使えるかが問題らしい。幽香……君の特訓いじめのおかげだね……

志貴さんに技の基礎を教えられたり、組み手をしたり……はつきり言って折れてない骨とかないんじゃないかと思う。でも僕はあきらめなかった……

だってあきらめたら必死に教えてくれる志貴さんにも失礼じゃないか。

ある程度したところ……僕は技……七夜の技術の伝承が始まった……

side 志貴

初めに言おう異常だ……体力面等もそうだが（それを行った時明久は遠い目をしていた）まあ、これは『』に到達したときに身体能力等自体も強化されているのかもしれない（ゼルレッチさんがそんなことを言ってた気がする）

だが問題なのは学習能力だ。教えた動き、技、道具の使い方、体の使い方、魔眼の使い方をまるで水を吸い取るように、しかも限界なく吸収しものにしていくのだ。

何より……それは技を教えているときに起こった……

「志貴さん」

「ん？どうしたんだ？」

「実は見てほしいものがあった……」

そう言うと明久は刀を構え……

「……散れ……」

閃鞘 散華時雨

「・・・なっ・・・」

「八点衝とかを刀とかでしようとしたら難しくて考えたんですけどどうですか？」

「・・・自分で考えたのかい？」

「はい！！あ、これのすごいところは密度を変えると範囲を変えられるところなんですよ」

その七夜の技から新しい技を作る才能、そしてそれを完成とまで昇華させる技術・・・

本当にこいつは人間なのか？

side 明久

師弟なつて1年くらいたった夜・・・僕と志貴さんは森で試合をしていた・・・

『キン！！ドカツ！！』

「ぐっ！！」

「・・・隙だらけだ」

閃鞘 八穿

志貴さんが視界から外れ・・・真上から斬りかかってきた

「蹴り穿っ！！」

閃走 六兎

僕はそれに対して瞬間的に六発蹴りを叩き込み志貴さんを吹き飛ばすも・・・志貴さんはひょいっと受け身を取り・・・

「遅い」

閃鞘 一風

志貴さんは僕の胸あたりに肘を叩きこみ、そのまま後ろに投げ地面に叩きつけた

「がはっ！！???」

頭から叩きつけられていたら死んでいただろう・・・

「はい、ここまで」

「あ、ありがとうございます・・・」

「ふう、でも本当に強くなったね」

「まだ志貴さんに決定打入れませんけどね・・・」

「あはは、弟子にそんなに簡単に抜かれてたまるかよ。」

ふう・・・でもやっぱり一撃くらいちゃんと当てたいな・・・

「・・・明久・・・」

「?なんですか?」

「俺は今日ここを出る」

「・・・やっぱりですか・・・」

「?わかったのか?」

「だっていきなり試合するぞって言われたらわかるでしょ」

ホントは信じたくなかったけど・・・

「俺が教えられることは教えた。あとはお前がどう昇華させるかが問題だ」

「・・・はい・・・」

「でだ、お前にこれをやるうと思っただけ」

そう言っただけで志貴さんが取り出したのは・・・

「こ、これは・・・でもこれって志貴さんのじゃ・・・」

『七夜』と刻みこまれた金属棒・・・仕込みナイフだった・・・

「あ、これはなまあ物探ししてる途中の世界で拾ったものなんだが・・・」

「これの持ち主・・・『俺』がどうなったか知らない。もしかしたらこれを使わなくていい生活をしているか、もうとい昔に死んだかもしれない。倉庫で見つけたからな」

「それって泥棒じゃ・・・」

「だがこのナイフは頑丈だな。吸血鬼の一撃をくらっても刃こぼれすら起こさない」

話をそらした・・・

「俺が2つ持っただけでも仕方ないし、こいつも使われるのが本望だろうし」

「・・・」

「それに師匠から弟子に送れる物として明久に受け取ってほしい」

「・・・はい」

それを受け取った時、持ち主のいろんな思いを感じた気がした

「……………」

『カシャ！！チャキッ』

すごい。まるで合わせたかのように手になじむ……

「さて渡すのは渡したし……自主練怠るなよ？」

「はい。志貴さんもお元気で、姫様よくなるといいですね」

「あのお姫様は気ままだからね。じゃあな」

そう言っただけで志貴さんは懐から出した宝石剣で空間を切り裂き消えて行った……

「ふう、とうとう今日、Aクラス戦か……」

しかし懐かしい夢を見たな……あれからいろんなことがあった……
自分の能力がわかったり、この目の本当の正体がわかったり、新しい仲間ができたり……

「志貴さん、僕は今を進んでいますよ」

僕は制服にいつもどおり志貴さんから受け取った『セツ夜』仕込ませ、

大切な仲間達が待つロビーへと向かった

PV5万超え記念短編 殺人貴との会合（後書き）

やばい、志貴のしゃべり方が・・・

今回は明久の過去についてでした。

明「やっと僕のことが出てきたね」

うん。文才なくてごめんね・・・

明「大丈夫だけど・・・」

・・・首吊ってくるわ・・・

明「やめろ！！」

次回からAクラス本編です。

この話の明久の持つてる七ツ夜ですがパラレルワールドの倉庫にあったのをお姫様の吸血衝動を抑えるためにいろいろと世界を飛び回り、たまたまたどり着いた志貴がうば・・・拾ってきた物です

あと時間に関しては明久の学習速度がおかしいだけです

第19話 Aクラス戦前 Fクラス（前書き）

Aクラス戦前の交渉前の話です

第19話 Aクラス戦前 Fクラス

Bクラス戦から二日経って、Aクラス戦について雄二からの説明が始まった

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があつての事だ。感謝している」

・・・こいつは誰だ？雄二の皮をかぶった別人か！？

「なんだよ？ゴリラらしくない」

「いい加減その呼び方やめてくれないか？」

「・・・で坂本。どうしたんだよ、らしくねえ・・・」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。

ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ちたい。勝って、生き残るには勉強さえすれば良いってモンじゃねえっていう現実を、成績だけが全てとしか見てねえ教師共に突き付けてやるんだ！」

「」「」「そうだ、そうだ！！」「」「」

でも努力ぐらいしようね・・・

「皆、ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着を着けたいと考えている」

「どついつ事だ？」

「誰と誰が一騎討ちをするんだ？」

「それで本当に勝てるのか？」

雄二の言葉に、教室中にざわめきが広がった

side 幽香

「落ち着いてくれ。それを今から説明してやる」

そうは言ってもどうするのかしら？

「まず、戦るのは当然俺と翔子だ」

代表同士の一騎討ち。まあ、当然と言えば当然よね……でも

「普通にやって今に雄二が勝てるわけ……」

『ヒュッ』 (雄二が明久にカッターナイフを投げる)

『パシッ、ヒュッ!!』 (妹紅がキャッチし投げ返す)

『ヒュッ!!』 (私もついでに雄二にペンを投げる)

「うわっ!?!何すんだてめえら!!」

「最初にやったのはお前だろ!!」

確かにそうね、それに

「今度明久に同じことしたら……アテルワヨ?」

「マジですいませんでした」

「ま、まあ、明久の言う通り確かに翔子は強い。まともに戦い合えば勝ち目は無いかも知れない」

だったら、カッター投げないでよ

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともに戦い合えば俺達に勝ち目は無かったが、俺達は今こうして勝ち進んで来ている。今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない。俺を信じて任せな。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

「……おお……!!!」

（（いや、無理でしょ……））

あら？なんだか明久と考えが重なったような……

「さて、具体的なやり方だが……、一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は100点満点の上限有り。召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

ふん、何か秘策でもあるのかしら？

「でも、同点だったらきつと延長戦だよ？そうになったら問題のレベルも上げられるだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「まさか運任せとか言わないよな」

「おいおい、お前達。あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでもそこ

まで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「じゃあ、雄二は霧島さんの集中力を乱す方法を知っているとか？」

「アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題も無いだろう」

あら、まるで霧島さんのことなら知ってるような口ぶりね・・・

「雄二よ、あまり勿体振るでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」

「ああ、すまない。前置きが長くなったな」

「俺がこのやり方を採った理由は一つ。それは、『ある問題』が出ればアイツは確実に間違えると知っているからだ」

「ある問題？」

「ああ。その問題とは・・・『大化の改新』」

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？小学生レベルでそんな問題が出てくるのかな？」

「いや、そんなに掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純というと・・・起こったのは何時代かとか？」

「もしくは年号とかかのう？」

「お、ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら俺達の勝ちだ」

そんなにうまくいくのかしら・・・

「簡単な問題なんだが、翔子は確実に間違える。そうしたら俺達の勝ちとなり、晴れてこの教室とオサラバって寸法だ」

すごい自信ね・・・それよりさつきから気になってたけど・・・

「あの・・・」

先生や八意先生とも聞いてる限り仲いいんだぞ!？」

「な!？雄二おま・・・」

「・・・吉井イイイイ・・・!!!キサマも異端者だ!・・・!!!」

『シユカカカッ!!!』

「お前ら・・・」

「貴方達・・・」

「明久に手出したらどうなるか解ってるよな(わかってるわよね)？」

はあ、呆れてこの頃溜息が多いわ・・・

「あの、吉井君」

「ん?何?姫路さん」

「吉井君は、霧島さんみたいな娘が好みなんですか？」

「へ?そりや霧島さんは美人だけど...好きではないかな」

「けど好みかと言われたら・・・って、ええっ!？何で姫路さんが僕に対して攻撃態勢取ってるの!？そして美波!？君は何故教卓なんて物騒な物を僕に投げつけようとしてるのさ!？僕が一体何をしたと!？」

「吉井君にはお仕置きが必要な様ですね」

「覚悟しなさいアキ。その性根を叩き直してあげるわ!」

「それならまずあんた達は言葉について習ってこい!！」

「あと話を聞くこともね」

私と妹紅は二人を抑えつける

記憶が確かなら姫路って子もうちよつとまとも子だと思ってたけど
気のせいだったのかしら・・・

side 明久

なんとか命の危機を脱出すると

「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆」

「冷静になつてよく考えてみるが良い。相手は『あの』霧島翔子じ
やぞ？いくら幼馴染とはいえ、男である雄二に興味があるとは思え
んじやろうが」

「まあそれもそうだな・・・」

「むしろ興味があるとすれば・・・」

さつきまで暴走してたFクラス男子が一斉に姫路さんを見る

「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

「いやいや。別に何も」

「何もしてないけど、何かされる可能性が・・・」

「え？」

「「「「いいえ、何でも！」「」「」

「????？」

やっぱりみんな噂を鵜呑みにしてるみたいだね・・・

とにかくっ！俺と翔子は幼馴染で、俺達が小さい頃に俺がアイツに
間違えて『大化の改新は625年』って教えていたんだ」

「貴様ツ！！まだ幼くて何も知らない純粹無垢な霧島さんに嘘の情
報教育を施していやがったのかッ！！」

「何て外道な奴なんだ!!」

「……許されざる行為……」

「ええーい、もう何とでも言え!!取り敢えず今は黙れ!!話が進まん!!」

どんまい、雄二

「アイツは一度覚えた事は絶対に忘れない。だから今、学年トップの座にいる。しかし、今回はそれが仇となるんだ!」

雄二が黒板をバンツと叩いて皆の注目を集める

「俺はそれを利用してアイツに勝つ!そうしたら俺達の机は……」

「システムデスクだっ!」

そううまくいくかな……

第19話 Aクラス戦前 Fクラス（後書き）

交渉まで行きたかったが二分割。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2653z/>

僕と幻想郷と召喚獣

2011年12月15日00時49分発行